

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

4050-1

明治四十四年四月五日發行

人間學友會報

第二號

人間學友會發行

L050
1

人間學友會報 第二號

目次

一、教育勅語	發智會頭
一、戊申詔書	
一、忠君愛國	
一、座右の銘	
一、澁澤男爵と高田博士歡迎會に於ける人間郡早稻田出身撮影	澁澤男爵
一、大國民の襟度	高田法學博士
一、立憲國民の覺悟	市川入間郡長
一、細民救助に就て	會頭
一、朝鮮視察概要	松下生
一、多方面なる生活の輕重	學校歸り生
一、憲法長物語	北田政之助
一、寢臺	森田治平
一、登錄記	

9698

一、阿須山奇崖の探勝	清水芳雪
一、偶言數則	松下操
一、遁世閑居の決心	安部立郎
一、地方青年團體に就て	
一、雜談	
一、話の報	
一、會報	
一、報告 △第六回大會費用決算	
一、編輯たより	編輯子
一、長壇の辭	北田政之助
一、入間學友會獎學事業の趣意	
一、贊助會員と寄附規定	
一、貸費規則	

△評議員幹事及會員有志者新年會△幹部慰勞會△會報發刊
▲幹部の會合△大會の準備△大會後の盛況△慰勞會△會頭
渡韓△評議員井上力氏逝去△評議員の依頼△幹事の増加△
大會雜記

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民
克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華
ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友
相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民
タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今
ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ
一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

明治二十三年十月三十日

阿須山奇屋の探勝
偶言數則
通世閑居の決心
地方青年團體に就て
雜談
話の報
會

清水芳雪
松下操
安部立郎

9698

△評議員幹事及會員有志者新年會△幹部慰勞會△會報發刊
△幹部の會合△大會の準備△大會後の盛況△慰勞會△會頭
退席△評議員井上力氏逝去△評議員の依頼△幹事の増加△
大會雜記

報告 △第六回大會費用決算
編輯たより
長瀬の辭
編輯 子
北田政之助
人間學友會獎勵事業の趣意
資助會員の書附規定
會費規則

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民
克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華
ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友
相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民
タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今
ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ
一ニセシコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ク大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑々我神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

忠君愛國

皇室與國家則壹而不貳
忠君與愛國則合而不岐
是我皇室所以無比於萬
古也是我國體所以冠絕
于世界也

座右銘 三則

神州孰君臨 萬古仰天皇
皇風洽六合 明德作太陽

(藤田東湖)

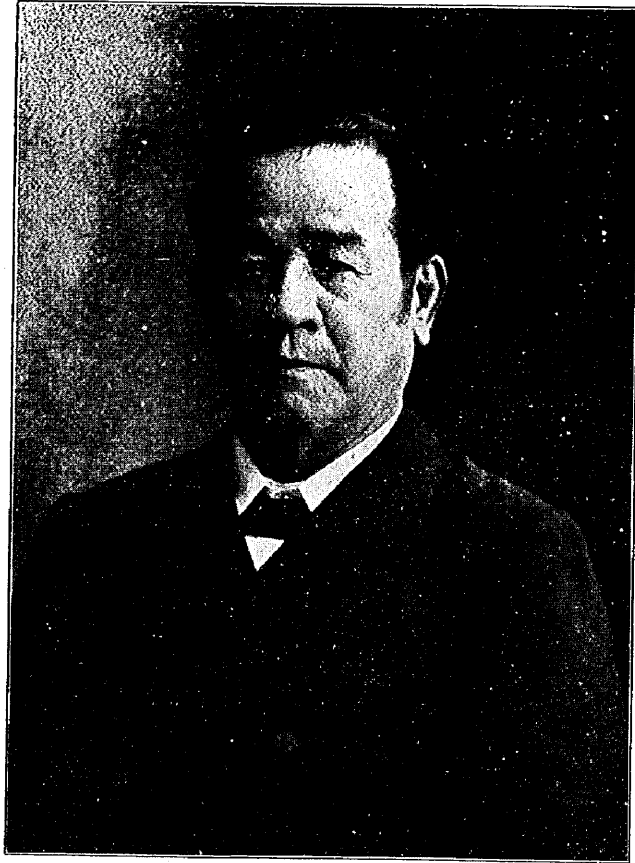
富貴不能淫 貧賤不能移 威武不能屈
此之謂大丈夫

(孟軻)

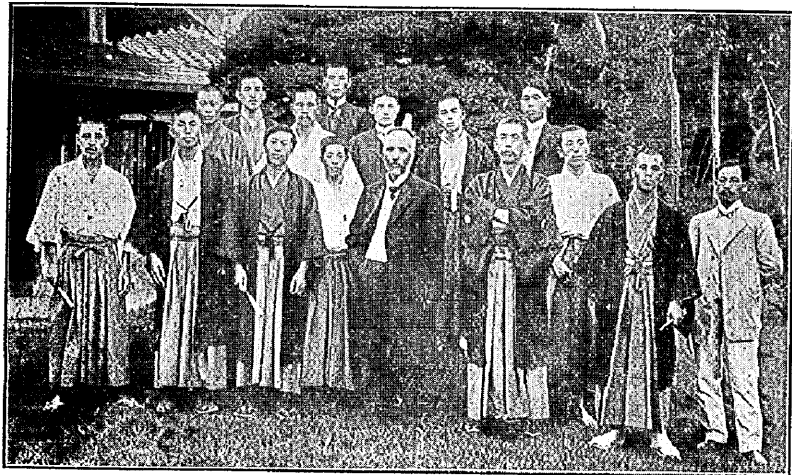
一國ノ貴トマルルトコロノ位價ハ其人民
ノ貴トマルルモノノ合併シタル位價ナリ

(三)

澤 男 爵



高田博士歓迎會に於ける入間郡早稻田出身



人間學友會報 第貳號



大國民の襟度

本篇は昨年九月四日本會大會に於ける男爵の講演筆記なり(文責在記者)

澁澤男爵

私が只今發智會頭から紹介されました澁澤であり升。私は御出席の諸君と同縣の出生で御座いますが、幼少の時分、松平大和守の城主であられました頃は度々参つたことはありましたが、其れ以後は鐵道が連絡された時に通過致した切で、多數の諸君と遭遇する機會の無かつたことをお怨み申す次第で御座います。然し今日の如く斯く多數の諸君、殊に青年諸君にお目に掛かりましたことを光榮に且つ愉快に存じ升。

只今は會頭から各地方の青年團體、又は優良學生に向ひまして、其れ／＼御選奨がありました様ですが、其々先輩諸君の甚だ行き届きました御指導の下に、皆、各々立派なる團體をお造りに成りましたことは、深く御心意の程感服致す次第で御座います。

私は御覽の通りの老人で、御一新前に呱々の聲をあげ、所謂古風の漢學的時代の中に人と成つたのでありますが、其れからの進歩殊に御一新後の進歩と云ふものは素晴らしいもので御座いました。斯くも進歩したと云ふものは、畢竟しますに、其根元は教育にありまして、教育が斯くもならしめたものと考へます。併し教育なるものが直接に之が發達を促したのではありますまい。否教育そのものが斯くもならしめたのではありますまい、一寸申して置きますが、こゝに云ふ教育は狭い意義に云つた教育では有りません。廣義に解した所のもの

てありますから、必ずしも學校に出て、書物を讀むのみを申しません。即ち間接に青年團（當時の自由黨改進黨の類）の如きが發奮努力した充分なる實地的教育が大に與つて力あることと有らうと思ひます。

實に吾々老人等は、随分古いことも新らしいことも見聞して居りますので、何事をも以前と現今とを比較する觀念は常に多いのであります。總べて物事は、其の根元を考へて見ますと、自ら或は獎勵され、或は現狀維持、或は破滅するゝが如く變遷するものであります。前申した通り日本は非常に急速の進歩を致しましたが、其れ以前の制度と云ふものは、所謂階級制度なので武士が首位にあつて百姓町人は大名の玄關にさへ首を出すことが出来なかつたと云ふことを私は知つて居ります。ですから、吾々は九て蟻蟻同様に見られ、又、取り扱はれた昔と士民平等の制度である今日とを比較して見ますと、妙に感ずるのであります。何れにしても、斯く大業を爲す根元を作るには教育に待たねばなりません。

扱て、日本は御承知の通り世界一等國の班に加はり、世界に響つて幅の利く譯てあります。斯く短い歳月の間に駸々乎として進んだ名譽は偉大なものであります。然し日本國民が如何にして之を完全に維持し、且つ完全に發達を計つて行くべきか問題で、深く考慮を廻らねばなりません。

茲で私が御話するのは演題として掲げるならば、吾が實業界の有様は如何、大國民の襟度は如何と云ふことであります。諸君も御承知の通り千七百年前に韓は一度我れに降附し、其の後分離して居りましたが、千七百年の今日漸くこゝに解決して日韓合併となりましたが、先には神功皇后様が御憂慮なされまして、三韓征伐を御企に相成り、其の後秀吉の文祿、慶長の征伐や、其れからずつと、後になりまして西郷等の征韓論と云ふ順序になつて居り升が、いざ合併となりますと、人情吾々臣民としては、雀躍して喜ばざるを得ないので有り升が併し千七百年後の今日喜ぶと云ふことを神功皇后様は黄泉の下に、如何に考へなさるでございませう。

征韓論當時の殘生者の一人であります板垣伯が其事を叮嚀に述べられましたのを私は記憶してゐます、同伯の説に依ると、成る程其當時の人の感情は斯くの如く鋭いもので有つたかと疑ふ次第も御座います。其の後韓

國のことに付きまして明治二十七八年には清國に對し乃至に訴へて事を決するの已むなきに出て、次では先年俄國を敵として輸贏を決した結果、韓國の優越權を承認せしめて彼の國に權力を得、遂に彼千有餘萬の國民が我が同胞となつたこの事實こそ即ち我國が世界の一等國の列に連つた一つの確固たる事實であると、私は信じます。

これは誠に吾人の名譽でありますが、併し併せて来るもの、否、必然來なければならぬものは、吾々、特は今の青年諸君の負擔すべき責任の重大なる一事であります。私は常に家風は糾へる繩の如く、名譽は傘に積れる雪の如しと云つて居りますが、傘に積れる雪は之を我が物と思へば輕いものであります。之を我が物と思ふゆゑから重いのであります。其れと同様に名譽に伴ふ責任を他人の雪と思ふから重いのであります。（喝采）

私は國民に對する希望は多々ありますが、此の席上の青年團體否我國五千餘萬のものゝ考へて戴きたい事で早く本縣人よりこゝに留意して貰ひたいことがあります。曾つて東京商業會議所で私の意見を申したことが御座います。兎角東洋人としての日本人の性質は或は斯かる事が有らうかと思ひます。其二、三を申して見ますと第一に、一體人間と云ふものは、必ず感情には動かねばならず之を遠避くる譯には行かないのですが、然し人間は感情の動物なりと迄に謂ふのは、或は餘り極端では無からうと思ふので御座います。

其の感情なるものは、激し易く、且、醒め易いので、激すると或は後に悔ゆるも償ふことの出来ない過失を生じ、其極を過ぎて醒めれば、失望落膽する、是れ我國民一般の狀態であります。之れを大國民たる性質の夫に思ふべき事で、屢々經濟界あたりで見られる事ですが試みに御覽なさい、かの經濟界は引き續き四十年餘の下落で、大に感情に走る人もあります。感情に走る人が好むと、さ迄善くない事も是と思ひ、さ迄惡くない事も非と思ふのが常であります。之は大に我が同胞の弱點かと存じます。（喝采）

甚だ激し、甚だ感じ、甚だ醒め易いのは、大國民としての資格を保つことはできません。（喝采）
今十、分上げて置きたい事は、一體東洋人の習慣として、私の交際と云ひ、祝儀と云ひ、徳儀と云ひ、其の方面は届いて居りますが、併し公徳となると非常に欠けてゐると云ふ事は私許りではなく、多くの人々が十

分認めてゐることであり、支那や朝鮮及び我國も、古來から西洋と大部其の趣を異にして居ると云ふことは、大勢の然らしむる所かも知れません。第一に東洋人は誠に約束を軽く視て、一と度約束して其れを履行しないのを何んとも思はず、又片一方の者も、其れを當然なる事と考へて居る位です。然し我國には古より武士道と云ふものがあつて武士は斯くの如き事は好まず、否、道徳は、大に斯かる事を忌み嫌つたのであります。之が一つの問題ではありませんか、今の商人と軍人と何れが道徳に於て卓越して居りませうか、一場御集りの諸君は、多く實業家であらうと考へますが、昔は武士と云ふと武士道を以て、其の精髓とし、よく武人たる面目を保ち、我々實業家から見ると、實に立派なものでありました。て、吾々町人即ち實業家は、其の向から殊に賤しめられたのでありませうが、明治に至り士民平等と成つて、元の武士はドシ／＼實業界に身を投じ、豆腐屋だの、八百屋だの、箱屋だのと云ふ者の如き比較的下級（武士から見ても）な者がドシ／＼軍人に籍を入るものであるから、今の實業界なるものが種が秀れて、今の軍人なるものが種が秀れてゐない譯であるのに、今日實業界が發達せず尻へに堂座として爲す所を知らないものであります、其れは竟り商賣人社會に公徳が修まらないからであります、商工業等の仲間には、或場合には、甲を乙が犯し、甲が乙を倒して、自己の利益のみ貪るが如き公徳の修まらぬ所から斯界に今日の欠點があるのであるといふ意味の事を會議所で話した事があります、事實に於て實業界の進歩の度合は軍人のそれに比して、遺憾ながら、彼我に勝つて居るのは、要するに道徳の修養の足らぬのと、さうで無いのとは係るのであります。

尙今一つ殊に實業家に對して、常に論ずるのは、徳義とか仁慈とかといふことで、人が世に處するに必要不可欠からざる修身上の務、精神上の修養を無視して、徒らに富の増大のみ計るのは、徳義に缺け、又、仁慈に反するものであります。

と云ふと諸君の中には或は金を儲けるに、そんなことを曰ふてどうなるものかと、絶対に打破する方も御坐いませう、そこで、識者の常に嘆ずる所は、先日一大學卒業生に私は噴然として申したことがあります、そ

唯「ア」甲「リ」唯「リ」の人は土木技師で某宴會の席上に於て、商人の虚偽は方便であると云つたその時私は大に之を咎めました。

信用が利益に伴ひ、虚偽が利益に伴ふならば信用と虚偽とは同一視せらるゝ譯になりますが、信用が虚偽と云ふことは云はれずまい、即ち虚偽をつくのが信用と云ふことでせうか、虚偽をつかぬのが信用と云ふこと

は、虚偽が方便である道具であると云ふのは、普通平々凡々たるものゝ意見であつて、探るに足らぬのであります。大學出のものすら尙、且、斯くは申します、獨り大學出其人のみでなく、中には、あれは虚飾の言である

と解釋する人も御坐いませうが、事實はさうで無いのです。商法に掛け引きと稱することがありますが、掛引とは體よく云ふので、其の實は虚偽なのであります、之れが我が商人の大に誠むべきことで、全く虚偽は信用を失ふ方便たるに過ぎないのであります。（拍手喝采）

然し歐米にも、多少其の種類の事がありますが、人格の高い英利吉人等は決してこの様なことは有りません、斯くの如くであります、漢學者、殊に宋朝學派の朱子學者は、頻りに道徳學を説いて、之が徳川の世に傳はり、大に隆盛でありましたが、之れは道徳や仁義を茶の湯的に研究したに過ぎ無いので、道徳は斯くの如きものであるとのみ教へるので、取りも直さず、平凡なる數學の先生が三角はどうの、幾何はこうのと、生徒に向つて理論を教へて、其の實地、即ち應用を教へないのと同様で、當時の學者は唯、學説としてののみ傳へた切であります、富を爲せば仁ならず、又仁者は富者ならず、と云ふのは支那教育のみであるかと思ふと、さうでも無い、たしかアリストートルかと思ひますが、總べての商業は罪惡の塊であると申しました、かくの如き大哲人でさへ危ぶんだ程、商業は道の立たぬものとしてありました。

富と人道、即、道徳と相交はれば、衝突すると云ふ様な有様では、大國民としての品格は無いので、斯かることを除かねば、富と人道と併ひ走せる神聖なる力ある國家たることは、出来ないものであります、殊に近來科學進歩により智慧の進歩はしたが、心の進歩が及ばない感があつて、唯富さへすれば、人は其れて能事終れり

と考へます孟子は

苟爲後義而先利不奪不讓

と云ふて居るが隣の妨げをしても、法律に觸れさへしなければ、互に利を奪ひ合ひ、甚しきは撲ぐり合はねば利を得る事はできないので有ります。唯利是爭ふと云ふ有様で有ります、目今人が或る利益を前に見て、道徳を顧みず、是れが神聖なる大國民の資格であるかと、私は大に疑ふ次第であります。

前に申した通り國の名譽を高めたのは喜ぶべきでありますが、名譽を高むれば高むる程その責任の重大なることを共に考へ、さうして偉大なる名譽を保ち、益々精神の修養を力めねばなりません、而して唯精神修養とのみ云ふて餘り歐洲に媚び過ぎると又昔の歐洲式になる、さうなると寧ろ逆戻りして進歩を留むることゝなるのであります、故に飽く迄、科學的進歩を計り國家と云ふ觀念に留意して、益々完全ならんことを計つてもらひたいと切に、希望する次第で御座います、ですから富を求め人道に背かず、やつて行けるもので、富と人道とは全く相伴ふて、併ひ馳せることの出来るのであります、必ず利を増しつゝ、仁をなすことの出来るもので孟子の教へた通り果して、斯くの如き域に達してこそ、大國民の大國民たる所以であります。

故に呉々も、青年諸君は、名譽の加はる責任を忘れず之を治めんと力めねばならぬと云ふことを希望致します、それには種々方法は有りませうが、前申した三點が最も肝要なるものであると御話し申した次第で御座います。(拍手大喝采)

立憲國民の覺悟

高田 法學博士

本日入間學友會が開會せらるゝに就て過日會頭が私の宅まで御來訪下され一場の講演をと云ふ御話で御座いました。入間郡は私の多年縁故ある土地で謂はゞ第二の故郷とも申すべき處であり、殊に本日は私共の先輩にして年齢も超えられ且非常に多忙の身にいらせらるゝ澁澤男爵すら本會に出らるゝからは御辭退を申すへき理由は全く無い譯で出席致しました次第で御座います。然るに斯くも多數の諸君來會の席に於て講演すると云ふのは甚私の光榮であつた且非常に満足に感ずる次第であります。一面私は今日道すがら大宮邊より水害の慘狀を目撃して非常に哀憐の情に打たれ茲に又痛切に學問の必要と云ふとを感じたのであります。

學問の必要

凡て文明人とは自己の智力を以て自然を支配し自然の横暴を抑制し得るものなので野蠻人は自然の爲すが儘に左右せらるゝであります。即ち文野の分るゝ所は

立憲國民の覺悟

自然を支配し得ると支配し得ざるに歸する譯である而して此自然を支配するには、それ相當の學問を要する。此頃西洋人が外字新聞紙上で日本人を嘲笑して帝國の首都たる東京すら濁水に浸害せらるゝは是れ日本人猶治水の術を解せざるなりと云ふ様な諷刺が見えて居た。即ち水害も相當の設備を施せば少くとも其浸害を軽減することは出来る。然るに是運命の致す所と認め三年に一度十年に二三度の洪水乃至百年一回の大洪水は免れずとして之を勘定以外に置くは日本人猶眞に文明の民にあらざるものと云はれて了ふ。一度戰勝の榮譽を得たる日本人も水害を防ぐ術を知らぬと云ふに至ては遺憾千萬甚だ肩身の狹まる次第である。兎に角治水の術を知るは學問の力を要する。組織ある學問を要する。併し學問と云ふても決して理屈一偏ではないかぬ。今日隨分學者があるけれども果して熊澤蕃山の如き治水の能力を有する人あるか。肥後の熊本に於て加藤清正以上に治水に成功せし人あるか。故に學問さ

へすれば立派の人になれる書物さへ讀めば偉になれると思ふは大きな間違である。

學問の方法

學問にも仕方がある。本にも讀方がある凡て應用が出来ぬ學問は死だ學問で何の役にも立たぬ。故に學問は學んだ方が宜いか學ばぬ方が宜いか或場合には問題である。先刻南京みやげと云ふ支那の御話(川上參三郎氏講演)がありましていろいろ聞くことを得ました私も先年支那の南北を稍詳細に視察した事があります。此南京は昔三國時代の呉の都たる建業、南北朝時代に在ては南朝の都、近古にては所謂金陵と稱へられ彼の晩唐の詩人杜牧が「南朝四百八十寺多少樓臺煙雨中」と詠じたのは此處であります。それから又「英雄一去豪華盡惟有青山似洛中」と云ふ詩もあつて博覽會のあつた時は知らず平素實に荒寥たるもので今日南京程荒れ果てた都は世界に無い。彼の長髮賊の亂に市街の殆ど全部は焼失して實に萬目荒寥何の見るものも聴くものもない。併し教育的方面を視察して一つ獲物があつたと云ふのは南京の貢院と云ふものである。

支那の科擧制度

一體支那では人材を科擧の試験に及第した者から採たので第一の秀才の試験に及第したものを先づ奏任官待遇とすれば第三の擧人の試験に及第したものは勅任第三の進士の試験に及第したものが親任官と云ふ様な仕組でこれが古からの支那の制度であります。それで秀才の試験場は各省の都にあるが擧人ののは全國に二三箇所しかない。南京の貢院も其一である。貢院とは人材を朝廷に貢き献ずると云ふ意味で江蘇江西安徽三省邊の人材が試験を受けるため集まる場所である。此處には天を塵する様な傳堂式の建物があつて試験官の出張所となり山門の様なものもあり、煉瓦の棟制長屋たるもの一千棟以上もあつて千字文で番號がつけてある。棟制の中は板で區畫を立て、一室一人一棟五六百人づゝ入れられる様に出來て居る。其一室は膝を容るゝに足ると云ふ様な狭いもので試験九日間は外出を許されず、食物も持込み、大小用の如きは隨所に自由行動を執ると云ふ有様、私の行つた時も殘跡諸處に尙存して居た始末であります。試験の時分には南京に十萬人

も集合し其中七萬人を従者としても残り三萬人は受験者で、此時は書物の價非常に騰り家賃も甚だ貴くなる次第で試験の頃は南京も中々盛である。

支那人は今も昔も勉強

私は支那へ行く前斯う思つた。支那人は昔は非常に勉強して孔孟を始め荀子とか列子とか程子とか朱子とか有名な人物を出し、詩人には李白杜子美の如きを生んだが今日の支那人は怠け者となつて平凡化したと。然るに同地に行てみると實際前の考は誤で今の支那人も中々本をよみ試験に應ずるために勉強する。南京に集る十萬の秀才は試験に及第するため勉強し苦勞するが分らぬ。支那に中等社會が無いと云ふ人もあるが、支那には確にある即此讀書人の階級で津々浦々至る所讀書人あつて、自ら一團體を組織して居る。故に支那人は立憲思想も解し得べく、中等社會も有して居る。然るにがくも盛に勉強して居るにも拘らず、これが支那國を盛ならしめずして却て衰へしむるの奇觀を呈して居るから不思議である。故に識者は已に科擧の弊を認め、故光緒帝の侍從官康有爲梁啓徹の如きは皆て

建言して科擧廢すべしと云ひ、又彼の張之洞袁世凱も西太后に建白書を奉り科擧を廢し學堂の制に改めよと主張した。要するに支那の科擧の如きは教育の毒であり學問の毒である。故に學は盛にすべきも只教育の方法如何によりては爲さるるにまゐると云ふことにな

教育の方針

學問は其人の心の向ふ所に從て自由研究をして自由競争をせしむるが宜しい。一定の型に押籠め一の形式主義にて人を苦しめ試験前の蘊蓄も試験の濟だ翌日から無一物となつてしまふ様では國家の運命知らるべしである。故に教育に就ては常に其方針を考へねばならぬ。書物のみ讀て教育の能事了れり矣と云ふ如きは抑も大なる誤である。教育の方針は國家の方針と一致するもので國家の方針は時代に依て定まるのである。即ち國家の方針時代の要求を外にして教育の方針を定め様がない。即ち政治と教育とは早く云へば合體すべきもので別々に存するものではない。國家を盛に世界に向て活動せしめ様とするのが國家の目的であれば教育

の方針も常に之に伴はねばならぬ。然らば國家を隆盛ならしむるに就て最も必要なるものは何か。言ふまでもなく國民一般の政治思想の涵養と云ふことである。

所謂一等國

今或國が一等國世界國となるとすると。一等國となれば、先づ一等國相當の財産を造らなければならぬ。恰も相撲を開くには夫れ相當の財産と資金とを得なければならぬ様なものである。で世間でよく一等國々々と云ふけれども一體一等國とは何であるかと考へるに角力の例が一番よく判かると思ふ。相撲に幕内、二段目三段目とある通り國家にも小國中國大國の區別がある。そして幕内中には大關關脇小結と云ふ特別に三役と云ふ地位がある様に大國の中にも又特別の勢力を占める世界國と云ふのがある。例へばバルカン半島の諸國などは小國で三段目、西班牙葡萄牙白耳義などは世界の中國で二段目、埃地利伊太利は大國で始めて幕内の格である。英吉利獨乙佛蘭西合衆國露西亞は世界國で三役の格である。此世界國と云ふのは行動が世界に及ぶもの大國と云ふのは一の大陸にだけ及ぶもので

ある。英國の如きは兎に角横綱の地位で其勢力範圍は世界至る所に及び、英國々旗の上には太陽没することなしと云はれて居る位である。

日本は露西亞と云ふ相手を投げて小結位にはなつた即世界國の中に入たけれども油斷すれば退かないとも限らない。丁度鳳と云ふ相撲が關脇になつたが失敗して前頭に落されたと同じである。であるから是非一等國世界國たるの位置から落ちない様、尙出來るならば横綱の地位にも進んで行く様に勉め、又教育の方針を之に従て立てなければならぬと思ふがこれには特に國民全體の覺悟を要する。而してこれは別事ではない。即世界的活動をなせと云ふことである。

世界的活動の二種

太郎が損をして次郎が得をすると思ふ様な内輪の損得營利では國家そのものの損にも得にもならぬ。國民たるものは須らく世界の眞只中に乗出し、外國人と交り或は之と競争して得べきものを得て歸るべしである世界の市場に打て出て權利と利益とを獲得し世界の商業上に勝利を占むると云を覺悟を持たねばならぬ。尤

英帝國の實例

も私は敢て必ずしも洋行せよと云ふのではない。又必ずしも大なるをのみ勸むるのではない。麥藁眞田一本と雖是れ即ち國利を進むる所以に外ならぬと思ふ。そこで此世界的活動には大凡二種あつて一つは貿易は國旗に従ふと云ふ遣方、他の一つは國旗が貿易に従ふと云ふ遣方である。凡ての大國は皆二つの何れかを選て世界的活動をやつた。此貿易は國旗に従ふと云ふ遣方は露西亞流、今迄の日本流で國旗が先へ立て行き商人は後から十露盤をかゝえてついて行くと云ふあまり見ともよい事ではない。そして大抵不成功に終て居る。即露西亞の例で云へば先づ侵略し人民は後からと云ふ方法で滿韓の方まで手を伸して來たから我は劍を振て彼に一撃を加へた次第で、此遣方では必ず他國の反抗を招くので固より宜い遣方と云ふ事は出來ない。諺に「向ふにも荒神様がついて居る」と申すが此遣方は此諺を忘れたものである。

之に反して國旗は貿易に従ふと云ふ遣方は甚だ良策で成功に近い方法である。英吉利は此方法で最も成功した。

尙今一つの實例は南阿である。此南阿のトランスヴァールもキチネル元帥が印度の例を襲て成功したものであるが、一體南阿戦争と云ふのは南阿に金剛石が出るのと、希望峰殖民地より南阿一帯を統一する都合上是

非此南阿共和國を合併してしまわなければ邪魔になると云ふ様な理由から、有名なる彼のセシルローヅー此セシルローヅと云ふ人は英國人が常に自慢にする人物で、英人はよく製造者は自國にも他國にもあるけれども他國になくて英國にのみある製造者が一つあるそれは即帝國製造者たる此ローヅであるとして居る——此セシルローヅが獨力で南阿に國家的の大事業を経営し、後になつて之を本國の國家に奉獻して遂に今日の南阿聯邦とまでなつたもので、凡ての場合に英人は貿易の後に國旗が従ふと云ふ遺方である。従てかく實例を先にする所より他國人からは貪慾なる英國、我慾強き英國人と云はれて居るけれども、それに頓着せず、侵略でなく平和的に貿易を國旗に先て、其地歩を堅くし、漸次に國家の發展をなし、太陽の没せざる帝國を作り得たのである。之を兎や角云ふ所の歐人は未だ悟らざるものである。で我日本の遺方も是非此方法で進て行かなければならぬ。諸君、今後は到底世界に帝國の拾ひ物なんぞのあらう氣づかいはない。國民の決心一つに由ては此島にても世界に號令するに足るから滿韓に根據を張て平和的に人道的に政府に依頼せず世

界的に活動することが肝要で此の如き考を以て教育の方針を立てねばならんと思ふ。

國內は立憲主義

以上は世界的の活動即ち外に向ての活動であるが之に加へて今一つ國內の方面を述べなければならぬ。昔の羅馬、近代の佛蘭西の様に戦には勝ても内が潰えて「楚人一擧可憐爲焦土」と云ふ様なことになつてしまつては何にもならぬ。故に外に對するに加へて更に内を務めなければならぬ。天二物を下さずと云ふともあるが人の兩眼にして其一が外を見るならば他の一は内を省よである。そこで内の務とは即ち立憲主義の事で今日最良の政治は此立憲主義を擱て他でない。所謂憲政有終の美をなすのが我等の務である。聖天子も憲法を發布し給へる時詔勅を下されて「我臣民は即祖宗の忠良なる臣民の子孫なるを回想し云々此負擔を分つに堪ふことを疑はざるなり」と宣はせられて居る。即爾臣民は憲法の負擔に堪へ得べし故に之を發布すと仰せられた御言葉は我輩其當時を追想して未だ耳に新である。で今日では憲法以上に良いものはない。何故に良

いかと云ふに一言にして云へば立憲政治は愛國心を増すか故に良好なり。それ故天子も之を下し給へるなりと云ふことが出来る。元來愛國心と云ふものは立憲政治に依るにあらざれば起るものでない。そこで一歩進て。

愛情の起原

愛情と云ふものは一體如何して起るか云ふに互に盡したり盡されたりする裡に起るもので同じ我子でも自分の養育した子と里に出した子とは愛情が違ふ。却て里親の方が幾年か此子の世話をすると實の親の所へ歸すのを悲み今年も置いて呉れよなどと嘆願する例は世間に餘り珍しくない。殊に世の中では片輪の子程可愛いと云て片輪の子供は父母の手足を勞し、非常に心配を掛ける所より父母は特に之に對する愛情が深いものである。諺に遠くの親類近くの他人と云ふ事もある通り凡て愛情は接近して居て盡したり盡されたりするに基礎を有する。然るに專制國の政治に於て國民が政治に容喙するを許さず。國には君主と其下に官僚とがあつて政治を司り普通の人民は即土百姓素町人で政

治に與ることが出来ぬ。

若し政治を非議するものあれば牢獄の中に投じ、凡て國民は國政に心配すべからず意見を出すべからずと云ふ遺方で行く。かくの如く盡させず、盡す折を與へずして愛情の起らう筈がない。愛國心の起らう筈がない。今日我國は既に立憲國である。然るにもかゝらず若しも立憲らしからざる事ありては之れ大御心に對しても申譯のない次第。國民は是非共國事に盡さなければならぬ。愛情愛國心も從て生ずると云ふ分けてある。

事實の證明

以上は理論上立憲政治でなければ愛國心は起らぬと云ふことを説明したものであるが、尙一歩進めて事實に就て其然るや否やを知らうとするには日露戦争が一番よい例であると思ふ。日本人は日露戦争に勝た原因を武士道にあるとか何とか云て居るが露西亞人は日本の勝利は愛國心の強烈なるにより、愛國心の強いのは立憲政治より得たる賜なりと云て居る。此く負けた露西亞、早くも此點に着眼し、最も近き機數にて此戦争

を見物した支那人も又此邊の理を悟て、憲政出使大臣を各國に派して立憲の準備中である。其他波斯土耳其も立憲國となつて了た。かくて今日では立憲國即文明國、文明國即立憲國と云ひ得る様になつて即立憲國の範圍と文明國の範圍とは同一となつた。即道理も實例も愛國心は立憲國に生じ今日の國家は立憲政治でなければならぬことを示して居る。然らば吾人國民は此立憲政治を愛護しなければならぬと云ふ分けも明かになることと思ふ。

立憲政治の運用

尤も政體は政治をなすの道具で、道具は使手によることである。近來立憲政治は少しく不評判であるが、國の政體と云ふ様な複雑精巧な道具は運用する人に依て如何にでもなる。文明の機械を田舎の婆さんに使はせたら忽ち之を壊して了ふと同様である。故に現代の人は此立憲政治と云ふ道具の使方を覺えることが肝要である。永井柳太郎氏の英國氣質思出の記(博士は車中の無聊を慰むるため此書を携えられたれば其一二節を引用されしなり)に面白い一節がある(左記引用句

大意をとる)

「日本では忠臣蔵が演ぜらるゝと大入であるが英吉利では政治論が始ると田吾作社會に至る迄話の花が咲くから驚く」

英國ではバンに差支ふる身分のもでも新聞賣をつかまへてアスキスがどうのバルフニアがどうのと論じかけ、裏店の老婆まで公平の不都合のと語り出す云々」

かく英國には職人にまで政治思想が及て居る。英國人は津々浦々如何なる人も政治に興味を持て居る。日本人も願くは斯の如く政治思想を國民の全體が持つて欲しい。勿論政治思想を持つてと云ふたとて國民の多くが政治家たれと云ふのではない。實業家は益々社會に多かるべし、政治家は少かるべし。茲に政治思想を持つてと云ふは甲乙の政治家に付て判断を下し得る能力である。能く内外の形勢を察し中央政府に對する監視、選出すべき人物、選舉の方法を誤らざることである。國に緩急ある時身を殺して仁を成すと云ふは必要であるが、平和の時代には却て政治思想、政治道德と云ふことが必要である。否されば國は却て内より潰れること

となる。勝た日本内より亂れて負けた露西亞憲政の美果を收むるなどは好ましい話とも思へない。

「國の爲」と「己の爲」

政治と教育とは元來別物である。併し教育に政治思想を省くことの出来ないことは前述の通りである。世には個人主義の國家主義のと騒いで居るが、「國の爲」と「己の爲」とはさう何も別物の様にしなくともよい。曲解したなら二つながら悪い、けれども凡て個人の發達は國家の發展と伴はねばならぬ。又國家の發展するに個人は個人として伴はねばならぬと云ふ様に此二つは確に調和しなければならぬものである。のみならず吾人は自己の國家とのみを知て世界の廣さを忘れてはならぬ。吾人は自己と國家とを思ふと共に大に世界は廣いものであることを思ひ、人道を思はねばならぬ。世界平和なれば吾人又餘澤を受ける。吾人は國に盡す餘力、世界の爲に盡さなければならぬ。狭き個人主義及國家主義は害あつて益なし、併し漠然たる世界主義もいかぬ。吾人は「國の爲」と「己の爲」とを調和させて余力世界の爲にも盡すを以て賢なりと信ずる。即ち國の爲己の爲

も畢竟同一物で之を大書すれば國家である。之を小く書けば個人であると云ふだけの差に外ならぬ。忠君愛國の眞義は是である。

眞正の忠君愛國

吾人は世界の平和、人道の範圍を守て世界に雄飛活動するより外別に忠君愛國なるものを知らない。立憲政治を守て國內を鞏固にするより外別に忠君愛國の教があらう等がない。如何なる道に依て之を盡すかを知らしめずして只之を説くのでは何の役に立たうぞ。私が只今述べた所、布演した主義は私一個の主義でない。現代日本の二大偉人伊藤公が曾てたどつた所の跡である。大隈伯が奉じつゝある主義である。私は此兩偉人の、行へる所を究め、進める跡を尋ねて茲に私の述べた所は此兩偉人の道であつたことを明言して置くのである。要するに今後の國民は世界的活動と立憲擁護との二途に進んで始て憲政有終の美もあらはすべく一等國の地位を保つべく、教育方針の如きは自ら茲に定まるとい信ずる。是に於て我日本帝國の獨立は天地と共に永遠に大和民族の光輝は終古遂に沈消するこ

となかるべしと謂ひ得るのである。と茲に甚だ久しぶに喜悅の餘り愚見を吐露すること大概如斯（拍手大喝りに當地に参り斯くも多數なる諸君の集まられたこと 采）（文責在記者）

細民救助に就て

市川 入間 郡 長

本日私は一言挨拶の爲に出席致しましたので別に新しき獲物を諸君に呈すると云ふことは目下の所不可能であると云ふことを御断り申して置く。それと云ふのも近古未曾有の大洪水の爲め不肖私も職掌柄夫々諸方を奔走致しましてあれや彼やで頭腦も實に混雜を致しますし到底新しき御話を考ふるの暇も御座いません併し本日は入間の學友大會が折角開會せらるゝと云ふに出席しないと云ふのは評議員たる私の立場からしても職務に忠實でないことなきにしもあらずであるから挨拶旁出席して此演壇に上るの榮譽を得たと云ふ譯であります。入間學友會も年々隆盛に赴き同慶に存じます。併し物には輕重本末を考へて執行することが最も必要であるので私の心意は此頃常に洪水の被害地細民等の事に往復して居りますから今次の洪水の事に就て暫らく清聴を煩はし血あり涙ある諸君の同情に訴へんとするものであります。

今回の洪水は實に近古未曾有の大洪水で御座いますして其被害の及ぶ所一府八縣而して我埼玉縣は殆ど其第一位を占め殊に我入間郡就中是より程遠からぬ荒川沿岸の地方は實に慘劇を呈し酸鼻の極と云て宜しい。それは實に目も當てられぬ状態であります。彼等の中には衣食の凡てを押流され飢に疲れ病に苦み將に斃れんとしつつあるものも少なくない。諸君かゝる哀れ慘憺たる細民を救済すると云ふとは是れ目下の急務中の急務實に焦眉の急では御座いますまいか。故に我入間學友會に於ても何とか一つ設備を立てて餓惱める我等の同胞に同情を寄せ本會の事業として些少なりとも彼等の憂愁悲憫に沈める心を慰めてやつて欲しい。其法案の如きは幾らも

御座います。

次に私は水害當時の有様の實際を目撃致しましたが入間川荒川に押寄せ濁流は凄絶悲絶實に言語に絶する勢を以て殺倒し其時の光景何と形容したらよいであらうか。想像の言葉もない勿論田畑などの損害精算は未だ不可能でありますが家屋家具を流失したのも多く山田村にては溺死者十三名芳野村八名南畑村六名日東村飯た婦人が溺れんとしたのを幸に役所より出張した掛員が見附けて舟に乘せ或は寺で子を産ませ産湯を使はせ掛員が産婆兼醫師をつとめ悲喜交至たと云ふ逸話もある位。そして當時の慘狀を見て如何に恐しかつたか目撃した諸君も多數此に列席なすつて居るであらうが彼等の救済も請ふ先づ槐より始めよ有力なる本會などより好模範を出して頂きたい。或所ては小學救護會など一稱へて小學兒童の零細なる資金を集めて義捐金として罹災民に贈る計畫など立て、置く所もある。入間郡などにも同情者を得まして三千五百圓餘の義捐金を得ましたから之を今回細民に配希しやうと云ふのであります。其他種々の救護會もあり新聞にも義捐金募集が諸處に見えて居るやうである。要するに今度の大洪水に際して不肖私及ばずながら毎日視察に出かけ殆ど寧日無じと云ふ有様で損害に就て未だ精細なる調査を得ませぬが前申した溺死者三十二名、家屋流失百二十七個、緑田の全く石河原となつた處も多く御座います、併し此は十分の調査を経ず未明の部に屬して置きます。大凡此位の事にして話を切上げます。私は先にも申した通り挨拶旁出席致した次第でありますが兎に角細民の救済は目下の急務中の急務であると云ふことを再び申添え一面廣く社會の同情者に訴へ一面本會青年諸君の反省を煩はさんとする次第であります。（大喝采）（文責在記者）

朝鮮視察概要

附 滿州及北清地方雜感

入間學友會頭 發智 庄平口述

幹事 某 筆記

一 視察の動機及目的

東洋拓殖會社は朝鮮併合後に於ける拓殖民の經營に資する爲め内地の篤志者をして朝鮮の農事及政治經濟其他諸般の實情を視察せしむるの趣意にて各府縣一名を限り内務農商務兩大臣に囑して之れを撰拔せしめたり余は過て之れが撰に當り島田本縣知事より其の旨を余に通知し且つ國家の爲め奮て出動を促されたるを以て之れを快諾し明治四十三年九月二十六日を以て郷里を發し渡韓の途に上れり。

當時余の目的は日本と朝鮮、朝鮮と滿州、滿州と露國の勢力範圍に屬する北滿州及滿州と北清地方との政治教育人情風俗農業等が如何に相異してをるか之を視察研究して他日の參考に資せんとするの考慮に外ならず。

二 視察員一行

各府縣中病氣其他の事故により一行に加はらざるもの北海道青森山形宮城島根宮崎にして其他は豫定の如く十月一日釜山に參集するもの三十九人外に東拓の林理事外四名農商務省技師其他にて合計四十九人の多數に達したり。

三 視察行程

釜山より鐵路進永を経て昌原馬山に達し其れより海路鎮海灣の軍港經營を望み朝鮮列島中に航走し木浦港に達し江を遡り榮山浦へ上陸し徒歩して羅州南平光州潭陽を経て全羅北道に入り古阜扶安金堤全州に到り大場村より群山港に着し錦江を遡り江景論山魯城を過ぎ

公州府に至り京釜鐵路の中間驛たる鳥致院に出て永原府を経て京城に滞留すること數日鐵路開城府に着沙利院を過ぎ日清役に有名なる平壤に達せり。

時之れ十月二十五日余は福島縣田倉法學士と唯二人一行と分袂汽車に乘じ新義州に至り鴨綠江を渡り滿州地に入り安東縣より安奉線の輕便鐵道に乘じ草河口本溪湖等を経て奉天府に着又岐路に入り撫順炭坑を視察し瀋陽驛より京奉鐵路をとり山海關に萬里長城を見北清地方に入り塘沽天津を経て清國の首府北京に着す時恰も十一月三日天長節に遭遇し聖壽の無疆を異域に奉祝し滞留數日天津に歸着汽船白河を下り太沽沖を左折し渤海灣を横ぎり營口に上陸大石橋驛より南滿線に乗り替へ蓋平得利寺等の戰跡を経て大連港に着し其れより旅順の軍港に到り日露戰役の慘狀を仔細に觀察し大連より汽船航走三日間馬關に上陸し遂に十一月十九日海陸無事郷里に歸着せり。

四 併合後に於ける朝鮮人の感情

余は併合後に於ける朝鮮人一般が我日本に對して如何なる感情を懷抱して居るかと朝鮮内地旅行中は終始

朝鮮視察概要

十九

注意を怠らず最初余等の胸中には必ずや彼等は合併を悦ばず、憤慨の念禁ずる能はざるものあらんと然るに入鮮以來彼等は誠心誠意款待至らざるなく道路を修繕して余等の歩行に便し旭旗を掲げて余等の行色を壯にし老若男女の歡迎送者は日々千人に下らざるの狀況なり。

全羅南道の井邑扶安等は往時東學黨の根據にして暴徒の巢窟たりし地に於て一年以前迄は一人の行旅者に二三人の憲兵巡查を附するに非ざれば通過し得ざるの地なりしに拘わらず今回の合邦に對しては既に覺悟せしものならん余等の一行は些の危險を感ぜざるのみならず却つて非常の厚遇を受け其の歡迎接待の懇切なること全く想像以上なり彼等曰く日本人を日本人が歡迎せしめて日本人はさほどに思わざらん今回は我等朝鮮人が一切朝鮮的に歡迎せんとて朝鮮式の樂隊を繰り出し妓生の芝居藝人の輕業等を催し夜は彼等各自に其の家屋を開放して余等一行に提供し二人三人つゝ分宿せしめ其家族等は殆んど全幅の赤誠を捧げて歡待すること連日之れによつて見れば決して外面如菩薩的の狂言にあらざることは余等の信じて疑はざる所なり。

或る宴會の席上朝鮮人某の演説中左の一節あり曰く日本の人口五千萬朝鮮の人口が一千五百萬之れを併合して六千五百萬人の大帝國が東洋に新に出來ました言ひ換ふれば我が朝鮮も此よりは儘に世界強帝國の地位に進みました、さすれば今日遙々御出になりし日本の兩班諸君是非共我々を導いて世界強國の人民に耻ぢざる様御指導の程を切に願ひ上げますと之れによりて見るも合邦の結果の良好なることは何んぞ疑ふの余地あらん。

五 朝鮮人の氣風及體格

朝鮮人の氣風は前記の如く全く無頓着なり今日を知りて明日を思はず其の原因は種々あらん就中虐政に苦められたる結果を尤も大なりとす彼等が少しく財産の出來れば官吏は無實の罪科を構へ之を絞め取らざれば措かず故に彼等は貯蓄心なく從つて勤儉の志は毛頭も彼等の胸中に存せず三日労働すれば三日は遊行に日を暮らす即ち労働中は垢ぢみたる衣服なれども遊行の日には其の妻子の苦心を重ねて洗濯せし清白の韓服を身に纏ひ頭に峨冠を戴き手に二三尺もあらんかと思はるる。

管を携へ且つ歩し且つ吸ひ悠々たる其態度は如何にしてても昨日の労働者とは見えず余等の旅行中此處の山間彼處の河岸遙かに白鷺の群し居る様を瞥見すると殆んど連日之れを認めざるなし近づきて之れを諦視すれば彼等の遊山見物に外ならず村間の辻又は景色の佳なる處には必ず日比谷公園地にあるが如き共同茅屋ありて皆是の中に腰打ち掛け煙草を煙らしつゝ談話し居る有様は余所の見る目も滑稽なり。

彼等の體格は頗る堂々たるものにして丈高く肉付よく邦人の如く身體が穹形をなさず日本人は申すに及ばず到底他國人と雖も彼等の體格には決して及ばざるなり其の原因は種々あり就中肉食の關係も爭はれぬ事實ならん余の考へにては朝鮮婦女の物を持つに握りたり抱へたりするものは一人もなく何貴女のものにても我が京都邊の大原女の如く其の頭上に戴きて眞直に歩行して居る習慣が習ひ性となりてかく立派なる體格の彼等を生みしならん若し朝鮮人に勤勉の心が今後起りしならば支那人を凌駕することは疑ふの余地なし。

六 朝鮮の氣候及雨量

朝鮮の氣候は三寒四溫と云ふて三日寒ければ四日溫く四日溫ければ三日寒い殆んど其の循環を變ずることなきは邦人の長く朝鮮にあるもの、齊しく口にする處なり滿州地に入りても亦然らざるはなし之れ寒流暖流の交互朝鮮海峽に突入する影響に外ならず而して其の寒暖の差は日本より頗る劇しきものあり。

雨量は至つて少なり一年中百日を越えることは決して之れなく我々一行の旅行二十五日間一回も雨の降らぬに徴して知る可し爲めに空氣は乾燥勝ちに而し入梅期は日本より一ヶ月遅るゝ故に養蠶等には非常に都合のよしなり。

七 朝鮮の地質及反別法

地質は壤土埴土砂土等にして固より一定せざれども余等の通過せし慶尙南道全羅南北道及忠清南道等の田地は地味至て宜しく河岸は沖積層に屬する壤土多く花崗岩壤土片麻岩壤土至る處に連續し日本の兵庫縣岡田縣廣島縣の地質と毫も變わることなく一見灰白色を帯び米作には適當の地味なりと信ず故に南韓地方の地味は埼玉縣大部分杯の田地の遠く及ばざる處なり。

尤も他の觀光旅行者の鐵道にて朝鮮を縦貫し其の沿線の地質を見て一概に朝鮮は瘠土なり荒他なりと斷定をなすものあらば蓋し早計たるを免れず然しながら鐵路の東北半は余等の踏査せざる所なるを以て或は瘠土たるやも測られずと雖も南韓地方は平野遠く連り大川處々に流れ儘かに其の沃田なることは余の保證する處なり故に三南地方は朝鮮の寶庫と稱し彼等の尤も誇りとする處なり。

然しながら山林に至りては何れも諸山にして間々松樹を見れども大さ合掌を越ゆるもの少なく木幹屈曲も見るに足らず朝鮮の林政は古來非常に荒敗せるものにして杉檜の矗々として鬱蒼たるものは余等旅行中一も見るを得ず日本人の頗る寂寥を感ずる所なり故を以て總督府も非常に之れを憂慮し目下殖林法を講究中なり。

又反別法は一斗落又は三斗落と稱すると雖も其の斗落なるものが不確實にして其の廣狹一定せず各地を調査して之れを平均すれば一斗落が四畝歩に該當するを以て一斗落半を我一反とせば蓋し大過なきに近からる。

八 朝鮮の農業

朝鮮の農産物は米、大豆等を以て其の主要なるものとす。殊に南韓地方は田地肥沃にして氣候温暖なるを以て米作殆んど耕地の八分を占む。隨つて大豆等は其の産額尠なり。雖も北韓地方に至りては之れに反するを以て大豆の耕作最も盛にして他の輸出額も頗る多きよしなり。

朝鮮人の農業法は至て粗雑にして到る處殆んど無肥料なるを以てさしも肥沃なる田地も一反歩米一石二斗位の收穫を起ゆること能はず。従つて種子を選擇するの意なく農具を具備するの考なきを以て米質粗悪、塵砂之れに混入し日本人の食に適せず。價格も頗る廉價なり。若し日本人にして之れを改良せば優に日本米を壓するが如き上等米を得且つ其收穫を大ならしめ一反歩二石五六斗位を得るは容易なりとす。是れ余等が各地移住日本民の農事状況を現在に視察して疑はざる處なり。

九 朝鮮農家の副業

農家の副業は棉花、果樹、養蠶、蔬菜、畜産、甜菜、人蔘等の栽

培を以て適當なるものと信ず。

棉花は全南地方を尤も盛なりとす。殊に木浦地方には棉花栽培協會ありて頻りに鮮民を奨励して之れが栽培に従事せしむ。協會の試作によれば大陸棉を尤も適當なる種類と斷定し日本支那朝鮮種等之れに次ぐ。又南韓の地方は乾燥勝ちなるを以て棉花の桃破れ期に雨なきを以て頗る前途有望なる副業として一般に之れを認むるものゝ如し。

果樹に至る處之れに適當なるものゝ如く三浪津に大規模の果樹園あり。羅州附近に馬淵果樹園あり。余等視察の當時即ち十月中旬の頃梨子繁々として枝にあり。又京城附近のトクソンには貳年生にて水蜜桃を多く枝につけ落下せずして美麗云はん方なし。如何に果樹の地質に通ずるかを知る可し之に加るにシベリア滿州地方の需要地を大陸續きに控ゆるを以て前途有望なりとす。唯だ柑橘類は朝鮮何れの地も適せざるよし。在留民の異口同音に稱ふる所なり。

養蠶は朝鮮の氣候風土には適當なるものにて入梅期節の一月遅れ即ち七月なるを以て上簇等には極めて都合宜しく故に従來日本人の來りて之れに従事するもの

多く本縣人橋本良平氏は専心之れに當り好結果を得んと苦心經營中に屬す。又或る道廳にては日本より其道の熟練者を聘し昨年より既に養蠶講習會を催し朝鮮の婦女を集め頻りに奨励して之れを傳習せしめたり。之れ又着々好結果を得たりと道廳主事本縣人島海茂市氏の詳細なる説明なり。き地味又桑園として決して悪からず隨處桑樹の繁茂するを見る。

蔬菜は氣候及地質の關係により日本より優等なる品を出し畜産中牛馬豚等は晝間は悉く放し飼ひにして山間及畦畔の草を嚙ましめて之れを生育す故に體格は至つて小なれども比較的牛は大なり何れも下等種なり。雖も頭数は極めて多からん。従つて價格も亦廉なり。田畑は多く牛耕を用ゐる。馬驢馬驢馬は多く荷負又は乗用とす。其の他肉用に供する畜産も仲々發達せり。故に牛肉百匁價十錢位にして豚等は之れよりも安價なるを以て貧民も平常肉食することを得て到る處肉商の繁昌するを瞥見せり。

甜菜は砂糖大根と稱へ糖分を含有する大根なり。是れ又東洋拓殖會社の保護の許に平壤及水原地方に盛に栽培せり。人蔘は古來朝鮮特有の産物にして開城に蔘政局

ありて政府の專賣なり。一ヶ年二百五十萬圓位の産額あり。盛に支那地方に輸出す。支那にては高貴の贈答品には缺く可からざる品なり。上等一斤相場は七八十圓のものありと。

十 朝鮮の商業

余は朝鮮人の個性を見て勞働的農民に適當するを認めと雖も複雑なる思慮を要する商業に適せざるものと思惟せり。故に朝鮮人にして商業家らしき商業家は何れの地にも見當らず。唯だ開城府のみは幾分か商業思想の富めるを見る。抑も開城は高麗朝の舊都にして五百年前李朝の爲めに亡されたるを以て府民は李朝の祿を食むを欲せず。苦心の餘り志を商業に傾け全國に行商して畜財の道を講ぜり。恰も我が江州商人の如き氣風あり。故に現今に至りても他の市街よりも比較的彼等商人の殷富にして機敏なるを見る。他地方に至りては商業は専ら日本人支那人の占領に歸し唯間口五六尺許の矮屋に一荷一擔きの商品を陳列して蠢々たるのみ。

由來彼等は貧窮なるもの多く何れも財産は些々たるものにして一體の購買力薄く現下彼等を顧客として商

業を営まんとする日本商人は頗る面倒を見て逐次發展するの方針を取らざる可からず然しながら將來日本人の移住日を逐て盛なる有様なれば日本人を目的とし朝鮮人を副として營むの計畫なれば亦遺利ならず然りと雖も余等商業門外漢は商業に對し口を封ずるの得策なるを信ず切に商業家の商業視察を朝鮮地方に爲さんことを望む。

十一 朝鮮の漁業

南西に面する海は所謂多島海にて島嶼無慮一千八百餘あり従つて海岸線長く氣候は三寒四温なるを以て鯉、鮭等の如く寒流の魚類を漁するを得鯉鰯等の如き暖流の魚類を漁することを得又鯛比目魚面鰈等の如き魚類も甚だ豊富なるを以て日本海岸線一里の漁民數と朝鮮海岸線一里の漁民數とを比較せば六十五萬人位の日本漁民の移住するあるも優に之れを容るゝの餘地ありと林某氏の談話ありたり。

十二 朝鮮の工業

朝鮮人の工業は極めて小規模のものにて全道處によ

りては苧布織物扇子團扇簾等の竹細工菓子紙漆器櫛冠等の手工業を見ると雖も詳記す可き價值なし唯日本人の經營にかゝるものは釜山、馬山、木浦、群山、京城、平壤、仁川、鎮南浦等全道至る處隨分大仕掛のものにありて其の種類は鑛山、藥砂、金、探掘、炭、炭、探掘、鹽、田、冷蔵、庫、鐵、工、場、造、船、所、釀、造、業、繩、川、製、造、場、なり。

十三 地價及土地買入法

朝鮮の地價は頗る廉にして田地一反歩上等三十圓中等二十圓下等十圓前後にして畑は上等二十圓中等は十五圓下等は十圓以下なり山林は田地に準じて是れ又頗る安價なり

土地賣買法は一體朝鮮は土地制度の不完全なる國にして日本人の往々之れが爲めに失敗するものあり是は彼等朝鮮人の狡猾なるもの其の制度の不未完なるに乘じ二重賣とか詐欺賣買とか邦人の不案内なるを奇貨とし種々の不正手段を働かす時によりては他人の田地を賣りつけ手付金を貪り逐天する等々朝鮮人と云ふ油斷は出來ず故に細心の注意を要する次第にて賣買法は第一面長の證明第二郡司の證明第三道廳の査證を経て取引

するなり。

十四 朝鮮の荒蕪地及蘆田

從來朝鮮は大河川の多くあるに拘はらず堤防は絶無なるを以て全道至る處荒蕪地多し邦人の農業に志あるもの之れを一見せば何故に地味の此くの如く肥沃なるに何故に之れを放棄し置くか彼等の無智憐む可しとなし之れを開墾し美田を得んと一圖に考へてみ咄嗟の間に之れに着手し太いに失敗を招きし例處々に多し如何に鮮人とても無慾にあらず之れを開墾する位の考按はあれども多年の經驗により其の土地は干魃の害あるか又は水害があるか收穫の望みなき故に之れを放棄して荒敗に委するなり之れを深く研究せずして開拓に従事するを以て巨額の費用を抛ち往々蹉跌するなり又現時の朝鮮にては地質が前記の如く安價にして開墾費用位にて買收し得らるゝが故に如何に勘定しても開拓は當分の間は割に合はぬ勘定なり將來内地の如く地價の騰貴せし曉きは別問題なり。

蘆田は河岸に多し朝鮮には薪炭材少なきを以て彼等は荻蘆を燃料とし之を温突に用ゆるを以て蘆田は普通

の田地よりも其の地價は却て遙に高直なり

十五 日本人經營の農場

日本人の經營する農場には十分成功せし農場もあり又收支償はざるものもあり岩崎家の經營にかゝる全州附近の東山農場大場村の細川農場川崎農場藤本農場等の如き成功せるもの全道到處所頗る多し石川縣の補助にかゝる石川縣農場の如きも前途有望なるものいなり。

進永に於ける村井農場の如き頗る大仕掛のものなれども今日收支の計算の如何恐らくは他日を待つの外なからん又大倉組の二千町餘の群山附近の田地の如きは既佳三四年間米の收穫皆無のよし香川縣人の經營せる韓國農業株式會社の如きは本縣人田中吉太郎氏木浦支配人として赴任し成績見る可きものありと之れを要するに朝鮮に於ける事業の成否は擔當者其の人の細心奮勵して事を處すると然らざるとによりて判定せらるゝものなり。

十六 東洋拓殖會社の移住方法

東洋拓殖會社は大資本を有する半官半民の株式會社にして頻りに農民の朝鮮移住を奨励しをれり兎角世上より惡評あれども之れは畢章朝鮮に於て土地を買収せんとする俗に云ふ商賣敵さの口より出づる風評なり會社は正々堂々朝鮮の開拓に向つて盡力しをれり今其の移住方法を摘記せん。

移住法には團體と個人又土地を年賦金にて交附する移住と小作人とする移住とに區別せり。

團體とは十人以上の團結して移住する者にして相互の保證にて二百圓以下の資金を貸與す耕地は移住民一戸につき田畑二町歩以上にして貸付當時の地價に年六朱の利を加へ二十五ヶ年賦にて済し崩しの方法なり。

今中田一反地價三十圓と見なし年利六朱を加へ二十五年ヶ年賦とすれば一ヶ年分一圓五十錢内外の年賦金を會社に拂へば二十五ヶ年後には移住者の所有に歸する譯なり若し又十ヶ年賦とすれば一反歩につき一ヶ年三圓内外の金員を支拂ふときは十ヶ年後には移住者其れ自身の所有となるなり之れを内地にありて一反歩米一石(金拾一圓)以上の小作米を年々地主に拂ふものに比すれば眞に貧民の福音と云はざる可からず唯故國

を離るゝ苦き決心を遂行するが本縣人等の苦痛とする所ならん。

會社の規則によれば移住者は家族を携帶し勞働に堪へ朝鮮に永住して朝鮮の土となる決心を要す徒らに濡れ手に粟を撈まんとするの精心にて移住せんとするものは會社の方より十分詮索の上之れを拒絶するの方針なるよし是れ又適當の處置と余は之れが賞讃を惜むものにあらす。

十七 移住す可き目的地

朝鮮各地の狀況の異なることは内地の其れと略同様なり故に農工商各種類により其の方面を同じふせず農民の移住地としては先づ第一に指を三南地方に屈せざるを得ず該地方は沃野遠く連り氣候溫暖にして内地とさほ異なる心地せず就中馬山と木浦との中間平野、光州附近、井邑金堤又は全州附近の平原、江景論山魯城附近は全等の見分區域中にては極めて有望の地區ならん該地方は鐵道の敷設も數年後に見ることを得加ふるに海運水運の便利なることは地圖を開けば一目明瞭の事實なり。

十八 移住民の覺悟

朝鮮に移住せんとするものは其の精神の極めて鞏固なるものならず可からず内地にあるよりは非常なる苦艱を嘗めるの決心なかる可らず右を見ても左を眺めても皆白衣の朝鮮人にて少くも一ヶ年間位は言語は通せず意志は疏通せず嘶しに行く友人なく相談相手の親戚なく眞に無味乾燥のものなり唯々其の業務に勉勵し其の業務を唯一の趣味快樂と心得其の收獲物を唯一の慰安と覺悟するより外なかる可し故に家族を擧げての移住ならては普通人の耐へ得る處にあらず。

前項の決心は移住者の金科玉條なり唯此の決心ありて然る後に移住せば何れの處か住居せざらん何れの苦痛か僻居せんさはいへ今日の朝鮮は如何なる僻地邊邑と雖も殆んど日本人の居らぬ處なければさしたる苦痛なからん而かも前項の決心は倒れぬ先きの杖にて尤も必要條件なり。

又移住者は第一に朝鮮語を研究するを要す既に朝鮮語を縱横に操り得ば何れの計畫を實行するにも極めて好都合なり土地を买入るにも金錢の融通牛馬の貸付を

なすにも意外の處に利潤を得て内地にありて想像せし以上の蓄財をなし得ん之れにつきても言語の研究は尤も注意することを怠る可からず。

遠き將來は知らず目下において移住者の困却するとは土地によりて教育機關の缺乏せると醫藥の不便なると住居の日本的ならざるとなり之れ等も總督府及び殖産會社等の盡力によりて近き將來に其の具備を見るの時期あらん。

十九 朝鮮の金融

京城に韓國銀行あり其の支店は各地に散在す又第一銀行支店あり其の他内地よりの銀行支店所々にありて擔保品は多くは商品なり銀行によりてなり不動産を抵當に取るものあり割引手形日歩は内地と多く異ならず二錢以上四錢五錢位に至る朝鮮各銀行の貸付高は種々あれども平壤三個の銀行にて余等旅行の當時百三十萬圓の貸付ありと平壤某銀行員の談話なり。

群山木浦邊の銀行貸付は何れも固定勝ちにて當局者は困却しをれり此等の銀行以外個人の朝鮮人目的の金貸は各地至る處にありて月四分即ち年四割八分位は恩

金のよしにて中には月一割の高利貸ありと是れ等は何れも返金するを目的とせず地所家屋を抵當にとり結局抵當流れを目的として地所買収の手段となすよしなり弱者なる朝鮮人も亦惻然なる哉。

二十 朝鮮に於ける農事經營に

關し各府縣の補助獎勵

岡山縣は四十一年度以後毎年金六千圓の補助支出
石川縣は四十一年度四十二年度毎年金二千五百圓補助支出
島根縣は四十一年度より毎年金四千圓補助支出
大分縣は四十三年度金六百圓補助支出
香川縣は三十九年度金三千圓補助支出
長野縣は四十一年度金三千圓補助支出
福岡縣は三十九年度四千五百圓四十年度四千圓四十二年度三千五百圓四十二年度千三百七圓二十六錢補助支出
高知縣は三十九年度二千二百圓補助支出
滋賀縣は四十三年度三百五十圓補助支出

し諸般の裁判をなすこと第四期の如し。
大略右の如くにして判決を受けし日韓人とも絶へて怨嗟の聲なし故に移住せんとする内地人も權利の保護は十分なれば安心して可なり。

二十一 朝鮮の勸業設備

併合以前迄は韓國政府の施設と我統監府の施設と諸般の行政に往々齟齬を來たし此の方の施設を彼方にて破壊し彼方の施設を此方にて破壊する等亂雜極まれり勸業設備に至りても亦此の例に漏れず併今日迄彼我にて施行し來りし有効なる勸業設備は
農事試験場 農學校 蠶業講習會 農産物品評會 模範苗圃 農會 種類選擇等なり。

二十二 朝鮮の教育

朝鮮には全道を通じて普通學校百三十許ありて朝鮮兒童に日本教師が日本語を以て諸種の學科を授くる所なり設備其他とも日本の小學校と大差なし唯年齢十七八歳位の生徒を往々にして見るを異なりとす之れは舊韓國政府の學部に於て經營せしものなり

二十一 朝鮮の司法制度

朝鮮の司法制度は今日は治外法權も撤去せられ外國人も内地人と同様の扱ひを受けることとなり而して其の今日に至る迄の間種々の變遷ありたり今解説に便せんが爲め明治三十七年我保護國となりし以來現今迄を五期に分てば左の如し。

第一期明治三十七年より同三十九年統監府設置迄は司法行政の區別なく行政府にて司法の事を兼ね諸般の裁判をなす。

第二期統監府設置以來は人民の權利を尊重するの意志にて四十年迄韓政府の法部に參與官を新設し其の下に種々の官を置き諸種の裁判をなす。

第三期四十年七月例の密使事件に胚胎して成れる日韓協約により新なる裁判所構成法を設け大審院控訴院地方裁判所を置く是れ朝鮮司法の獨立なり。

第四期四十二年七月韓國政府より我政府へ司法を委託す是に於て高等法院其の他を置き日韓人を判官に登用す。

第五期昨年併合後に於ける總督府も裁判系統を繼承

歐米の宣教師が耶蘇教主義を以て經營せる中學校程度の學校は全道中八百個以上あり頗る優勢なるものにて普通學校を卒業せしものを收容して之れに學業を授け其の精神的訓化をなすを以て目的とす校舍は各地とも形勝の地を占め大廈高堂巍然として中空に聳へ日韓人の家屋を睥睨する様傍若無人と見受けられたり何れも女學校施療病院等を備ふ

又儒生の教ふる私塾的のもの一千八百餘あり之れは朝鮮從來の教育法にして我維新以前の寺小屋流のものにて句讀を授けたるのみにて極めて形式的のものなり德育涵養知力開發等の效果は絶えてなからん。
其の他日本居留民の多き地には日本の小學校ありて普通教育を授くるは内地と毫も異なる處なし唯中學校程度の日本の學校のなきには各地とも頗る困却の體なり故に中學以上の學科を子弟に授くるには是非其の子弟を内地に送らざる可からず之れ頗る不便なりとす獨り釜山の如き大都會は府費三十萬圓中教育費に六萬圓を費消し中學程度の學校と小學校と合せて六個の學校を有せり京城其の他の地にも中學程度のもの幾分かあらんも知れず余は之れを詳細に觀察するの時間を有せ

つら。

二十四 朝鮮の警察

朝鮮にては警察官と憲兵を合一して憲兵隊長之を統率して指揮號令するなり某隊長曰く朝鮮人は小窃盜尤も多く詐欺取財、し地に關する犯罪、婦人掠奪罪、時局に關する罪跡等にて日本内地と比してさほどの相違なし又各町村駐在の憲兵巡查よりは隔日に本隊に其の狀況を報告せり其の報告によれば民心は併合後益々良好に迎ふ有様なりと。

二十五 朝鮮の暴徒

朝鮮の暴徒は明治三十九年蔡易玄と云ふ儒生あり頑骨時勢を解せず一時良民を煽動して所々に暴徒の蜂起せしことあり其の後中絶し例の京城にて鎮衛隊解散の後即四十年七八月の交再び暴徒の猖獗を來し四十一年春期全南の首府たる光州府を包圍し其の勢威侮る可からざるものありたり餘炎益々四方に傳播し容易に平定せず是に於て四十二年八月より大討伐に着手し渡邊憲兵司令官之れに當り捕獲掃蕩漸くにして全く之を鎮定

せり。

暴徒は最初政事的を標榜して起りたれども後には糊口に窮する爲め良民の財寶を掠め亂暴至らざるなく遂には良民の爲めに嫌惡せられ良民の密告するもの日に斷えず之れが爲め憲兵隊は大に搜索の便宜を得豫想外に迅速に之を鎮壓平定せしなり故に今日は朝鮮の大部分は毫も危険の懼れなしと云ふて可ならん。

又暴徒の盛なりし時にも農事其の他の經營をなしつつありて暴徒の慘害を受けぬ日本人も當時各地を通じて多々ありし一體朝鮮人は性來恩に感じ易し故に嘗つて世話を受け日雇に使はれしもの杯には仇をなすの精神なき故にかくは無事に毒牙を逃れ來りしなり。

二十六 朝鮮人の歴史的觀念

朝鮮の歴史は古代に渡りては隨分記す可き事多からんも自國に其歴史の整頓せるものなく隨つて歴史に關する書籍の極めて少なきを以て其の詳細を知るの途なし故に朝鮮人は概して自國の歴史を詳にせず否歴史的の知識は殆んど皆無なり是其今日を知りて明日を知らず唯事大思想のみ盛にして嘗つて愛國心執着心なき所

以ならんか

二十七 朝鮮の宗教

佛教は往古頗る隆盛を極め我國へ迄も彼れより傳播せしことは歴史に徴して明瞭なる事實なり今より五六百年前高麗朝の盛時は佛教の勢力至大にして國政に迄關涉し驕慢僭侈至らざるなし李朝の朝鮮全道を一定せし以來大に之れが壓抑に腐心し京城府内に一の寺院の存在を許さず全道の僧侶を屏息せしめたり爾來宗教心は漸々薄弱となり信仰心は漸々皆無となり遂に今日の現況に馴致せり。

耶蘇教徒は已に是に見るあり大々的布教を朝鮮に試ること茲に數十年遂に今日の如き優勢となりたれど由來朝鮮人の性質は前述の如く執着心のなきを以て朝付暮離宣教師等の苦心もさこそと思はる。

我佛教徒も近來は追々目を覺まし朝鮮の布教に着目し各地に寺院殿堂を新築し彼等を信徒に引きつけんとし説教に演説に餘念なしと雖も耶蘇教の如く金錢の後援少なきを以て戦闘力は彼れに比し頗る微弱なるものの如し。

二十八 朝鮮の美術

古代の建築には頗る美術的のものあり水原の訪花障柳亭京城の仁政殿平壤の大同門等は意匠優麗頗る見る可きものあり又京城の大理石彫刻の大塔の如きは世界の寶物として耻ぢざる程の美術品にて世に云ふ加藤清正之れを持ち歸らんとて上層を二重丈け地上に下せしが其の重量に堪へず之れを思ひ止まりしなりと。

高麗朝以前の銅器陶器等は尤も見る可きものありて今秘園内博物館に藏するもの何れも精巧雄大目を驚かすに足る又書畫類も館内に藏し何れも銘品にて古代の朝鮮は日本美術の師たるが如き觀ありて中々侮り難しとの感を惹起せり。

李朝の高麗朝美術を排斥し人民をして之を所持せざらしめんとせし結果は何れも之を地中に埋没し俄然無味乾燥の朝鮮に化し了せしめたり爾來數百年人皆な美術の思想を腦中より脱却し去り遂に今日の如き趣味を有せざる社會とはなりたるなり。

二十九 朝鮮人の美點

朝鮮人は父母近親の死去せしときは終りを慎み遠きを追ふの趣意により葬儀其他の事には頗る厚くするの風習あり故に墓地の撰定等は細心の注意をなすを以て通例とせり。

余等の各地を通過せし時朝鮮人の麻衣を着し竹皮笠を被りしものに時々出會するを常とす之れは父母近親の喪に服する期間の扮装なり是時には男女室を異にし飲食其の他もそれ〴〵注意して之れを妄にせず。

彼等の飯よりも好む酒と煙草も父母長者の前にては之れを飲まず之を喫せず堅く之れを實行することは余等朝鮮人家屋に宿りし時頻りに感嘆せし事實なり。

形式的の嫌はあれども男女の別は中々に正し又彼等は恩に感ずること非常に深く容易に忘れざるの美點を有し且つ其性質は一體に眞面目なり。

彼等は勞力に耐ふること支那人に過ぐと雖も前記の如く自暴自棄の結果幾日も持續せざるを缺點とす勿論一日の勞働力に付ては母國民は到底朝鮮人の下風に立つを免かれず。

余等の朝鮮觀察中奇異に感ぜしは乞食の少なき點なり怪んで之れを人に問へば曰く彼等は物を人より貰ふ

ことの意思は絶體になしと然し貰はんとしても與ふる人なきにやらんか此點は慥かに美事と云ふて差支なからん。

三十 朝鮮の將來に關する愚見

朝鮮人を駕御する方法は極めて多かる可しと雖も今之れを一言にて盡せば恩威並び行ふにあり恩以て之を懷け威以て之を正すにあり徒らに一方に偏するときは勞多くして功鮮きは從來朝鮮の事情に通ずるもの之を齊しく唱ふる所に於て今回の觀察により余も深く其の説の恰當なるを首肯するの一人なり。

然らば朝鮮の將來を如何にすべきか他なし我官民とも此趣意により諸種の施設をなす可きなり即ち行政司法軍事警察勸業教育交通につき尤も注意して彼等を威伏せしめ彼等を恩從せしむることを忘る可からず。

就中今回余の觀察により尤も焦眉の急にして而かも朝鮮將來の計畫として瞬時も早く着手を要するは第一教育第二移民の二項なりとす教育により彼等の精神を我に同化せしめ併せて其智徳を開發し移民によりて農事を獎勵し地力を擴大し母國人を彼等に接近せしめ彼

我意思の疏通を圖るにあり。

第一教育の制度は如何愚思へらく從來の教育方法は前項に述べしが如く不完全極まるを以て先づ普通學校を迅速に増加する方法を講じ該卒業者を收容する爲め全道適宜の地に簡單なる中學校凡そ三十六個位を差し當り建設し中等の學問を彼等に授くるの法を開き尙ほ樞要の地に特別大學をも設け大に彼等を教育する機關を整備す可し去りながら内地の其れの如く校舍其他の完全を望む可からず又教師は内地に於て大に各府縣師範學校を擴張し毎年多數の卒業生を彼地に送り出し教育上大々的發展を企圖せざる可からず是點に關する詳細の意見は余の別に朝鮮總督府に向つて建白せんとする所なり。

教育の方法は如何愚思へらく我國德育の源泉たる教育勅語の御趣意を彼等に信仰せしむる方法を講ずるを以て主眼とす故に愚見によれば教育勅語を經典とし彼の儒生等の從來講讀せし四書五經等を讀本として生徒に課し修身の大綱を確立するなり尤も他の學科は日本從來の方法を參酌して之に附加し其の心身を陶冶するを要す。

此の如き方法を以て教育せば從來朝鮮人中中流以上の精神を有し多少文字ある多くの儒生を活用し利用し助教の職を授け彼等をして衣食住に困せしめず之れを使役し之を懷柔し彼等をして不平の聲を發せしめずんば總ての方面に向つて一舉兩得の方法なりと余は信じ疑はざる所なり。

第二移民の制度は如何愚思へらく現今は國家の補助により東洋拓殖會社の獨占事業なれども年々僅少の移民を實行するに止まり到底現下の必要に應ずるに足らず宜しく總督府に於て大々の計畫を立て一ヶ年二千戸位は優に移住せしむるの方法を講ずるは急務中の急務なりと信ず。

又母國の富豪は國家的考慮を以て資本を朝鮮の農業に放出し年々溢れたとする母國の勞働者を引卒し彼我の便宜を計るは當今の尤も急務なりと信ず。

此の如く公私兩方面より母國民を彼地に移住せしめ政府より適當の保護をなし彼地に永住の決心を固からしめ又農事其他につき實地に朝鮮人を指導するは極めて有効の結果を現はす可し是れ即ち朝鮮人に實物教授をなすなりさじも無頓着なる彼等も速に目を覺す可

きは余の保證する所なり。

將來之の方法により母國民の續々朝鮮村に永住せんとする決心を生ずるに至らば歲月を経るに従ひ其の村の主權は皆母國民の握る所となり母國民は彼等の師父となり彼等の道案内となり愉快に安樂に彼の地に世を送るを得可きなり果して然らば朝鮮の統治上訓化上に關し至大の便宜を得るは余が喋々を要せざるなり。

三十一 滿洲及北清地方雜感

既に朝鮮の觀察談につき思はずべしを重ねたりし故に讀者の厭倦を恐れ滿洲及北清地方の觀察に關しては極めて簡單に其の雜感を記述せんとす。

鴨綠江を越へて朝鮮より滿洲に入ればかくも風土の變ずるものかと何人も最初に一驚を喫する處ならん廣漠たる原野は遠く連なり人民の家屋は全然其様をなへ開墾は山腹に及び畜類は圃間に群がり經營の行き届ける工業の規模の大なる宛然別天地の感あり。

萬里の長城以内北清地方に到れば地勢は略ぼ滿洲と同じく耕地は皆畑にして些の永田を見ず唯滿洲より層層の廣原にして東西南北見渡す限り一の丘垣をも見

ず泥んや山岳をや北京城附近も總て此の例に漏れず。余の北京にありし當時は恰も資政院の開議中に屬し大臣及各地の議員等は何れも市中を縦横に往返し何となぐ政事上の活氣を顯はし各省より運動者の北京に乗り込むの引も切らず就中國會速開運動は頗る激烈を極め東三省の氣勢は燃ゆるが如く壯士の意氣天を衝くの概あり恰も我國明治二十二年の有様に勢なり速開か又遲開か支那の前途も亦茫々漠々。

滿洲一帯の地は誰れも知る如く日本、魯西亞、支那の分野にして互に權力の發展に腐心する様は眞に豫想以上なり曇るか晴るか雨か嵐か余はこれを判斷するの明なしと雖も一言にて之を蔽へば渾沌と云ふより外形容の辭なし余は此の件につき筆を染むる能はざるを以て偏に讀者諸君の推定に任せんのみ嗚呼日本帝國の使命も又重大なる哉。(完)

多方面なる生活の輕重

松 下 生

道德も破るべし、人情も犯すべし、正義も捨つべし、體面何かあらん生活は目的也最後也とせば人と人との關係は利害の關係となり、平和は利害の一致となる利害相反すれば相交の交誼急に破れ昨の親今の敵となる即ち利害の前には君臣無く、親子無く、兄弟無く、師弟無く妻子無く、朋友無く、眷族無くんば此時に於てや人の生活は禽獸の生活となり人倫道德地に失して世は暗黒界となりぬべし嗚呼亦恐るべきかな、生活其者が唯一の目的にして而かも最後なりとせば人は安樂の生活をなし食ふに佳肴あり、飲むに綠酒あり、着るに美服あり出づるに輕車肥馬あり、居るに高樓大廈あり若し斯の如くんば阿房宮中に安座し春の朝秋の夕に天下の嬌奢を極めたる秦の始皇帝の生活は果して目的に達したるものなりや、世に御堂關白と稱へられし藤原氏の專權を一身に集め樞機に居ること三十餘年其女は三朝の后となり、其子は攝關に列したりし道長は果し

て其目的を達したる生活を營みしや否や、幾多の王公貴人は比較的完全に近き生活をなしたりと言ひ得べきや約言す生活の外部的要件は以て眞の人を造るに足るべき乎、

否々孔子は陳蔡の間に糧道を絶たれ、匪兇匪虎率彼曠野吾道非耶吾何爲至此と嘆じクッスとは「狐は穴あり天空の鳥は巢あり然れども人の子には枕する所無し」と言へり彼等は居るに金殿無く、食ふに美食なく常に饑渴、空乏、辛苦と戦ひつゝ世の所謂生活以外に生活したる也而して其名後世に垂るゝものは何ぞや。

孔子曰く賢哉回也、一簞食、一瓢飲在陋巷人不敢其憂回也不改其樂と其生活や遠く顔回の及ばざる所、憐むべき生活をなしたるミルトンが時間と空間との制限を脱して其名後世に忘れられざるは何ぞや、王公將相の嚴命よりも世はコンニョル聖哲の靜言に聞くは何ぞ彼等は生活の眞の目的を達したる也法るべきは生活の眞

の目的を達したる人に在る也彼や生活の目的がヨリ多くの衣服を得るに非ず、ヨリ立派の輕車肥馬を得るに非らずヨリ美食を食ふに非ず、其他の生活の要件を満足に非ずして唯だ生活の目的が世の所謂生活以外に存するに在り、生活以外に他に求むる所ある也換言せば、肉體的な生活に非らずして實に精神的な生活に在る也。魯の孔子曰く朝聞道夕死可矣とナザレのクリスト曰く「人はバジのみにて生くる者に非ず」と言ひたるは蓋し萬古不易の哲言たるべし。

若し形體を重大視したらんには生活は生活せんが爲の生活となり、人は生さんが爲に食ふに非ずして食はんが爲に生くるなり、生さんが爲に衣し、生さんが爲に飲むに非ずして、衣せんが爲に生き、飲まんが爲に生くるものといふべし。

斯の如くんば生活は最大目的也、生活は凡て也生活其者の以外に眞の生活はなからん家に黄金を積み、豊食に飽き優柔不斷、只だ厝の頁を繰返して居る輩は其黄金を眺め厚味を味ふて居る間が彼の生活也彼の目的也ソクラテスの從容として毒杯を傾けし所、近くは旅順港口に只だ一塊の肉と化し、天晴世に軍神よと謳

はれし廣瀨武雄の戦死せし所何ぞ壯快なる、パンデオンが正義の旗を立て暴税を拒み獄に投ぜらるゝも猶且つ屈せざりし所、楠子が生猶亡賊の一言を残して湊川に討死せし所千載の後に至るまで人をして如何に感奮せしむることよ、彼等は生活以外に眞の生活を解し其れ以外に更に求むる所ありしが故也、生活や一種の手段也行路也手段は目的よりも軽く樂園は行路よりも重し彼等や眞に國を思ひ君を思ふの餘り一身の犠牲となるを顧みざりき、彼等に豊食なく、暖衣なく高屋なし影の形に伴ふが如く常に辛苦、艱難等は彼等に伴へり。眞の忠、眞の孝、眞の義、眞の信は悉く生活以外に目的を置くよりして來るもの也生活は凡ての槓杆に非ず君に事ふるや生活の爲にあらざる國を思ふや、生活の爲に非ず、郷里を愛するや生活の爲に非ず、人を愛するや生活の爲に非ず沙翁曰く「金錢に算へらるゝ愛は乞食の愛也」と愛も亦此觀念を脱する能はざる乎。

生活を他の方面より見ば生に個體あり又團體あり個體の生は生活單位が個人也、團體の生は生活單位が團體也何を以て自然となし何を以て不自然となす或社會

學者曰く人類は團結的動物也とアリストトール氏は又人類は自然的政治的動物也と云へり何れの土地、何れの國と雖も最初は家族又は少數の種族より進歩發達して部落を形成し遂に大團結なる國家を成す傾向あるは史乘に徴して明なる事實なり團結の強弱は實に國家の盛衰に關し國家の盛大なるは取りも直さず其團結の強弱なるを語るに足るもの也、

國家の下には私利我慾なく私德發達し又公德榮ゆること彼の英に見ずや彼や政黨政治の下に在るに拘らず國家は益々圓滿なる發展を遂げ國民は各自人格を重ずると共に國家觀念盛なれば他國に比し優秀の美を放てる國家を形成して居るも亦其理無きに非ず、彼の歐洲列強の間に介在せる最小獨立國なるモナコに見ずや彼や歐洲諸國の權力の平均止今日尙獨立し得ると雖も一には人民の團結甚だ強固なるに因らずんばあるべからず伊太利に於けるロンバルト地方の如き歴史は數々其實例を語るものなり、古代羅馬人の如きは肉體としての個體生に重きを置きたる結果羅馬の歴史を汚したる實例あり中世紀羅馬に至りては備兵制度ありて團結の觀念を薄弱ならしめ從つて自己の生存を失ひたり彼等

備兵は戦争を以て商賣をなし生さんが爲に戦ふものなれば勝敗何れの軍に加擔するも自由也彼等の間には定主なく唯高價を拂ふ者あらば昨日の敵と雖も今日の味方となる親しむも黄金憎むも衣食の爲のみ何等の忠何等の信何所にか求むべき、羅馬大帝國の亡びたるも之が一因たるべく滅亡も又宜べなる哉團結は自然也何となれば文明國にもあれ未開國にもあれ人各々自我觀念を有すれば也自我觀念たるや自己の精神、身體は勿論父母、朋友、知己及び自己の周圍を圍繞する物體皆自我觀念の要素たらざるは無く郷土の山川草木亦其内容たり茲に於て乎共同要素の内に生存する人類は暗黙の間に自然的結合を生じ大にしては國民性を發揮し小にしては地方の精神をなすべし若し吾人より朋友、知己を奪ひ山川草木の異なる土地へ連行かれたらんには吾人は相互の關係を破られ自然的に郷土との團結を失ふに至るべければ也アフリカ探險家リビングストンの談に曰く氏が「アフリカ内地の探險を終り歐洲に歸る際一人の里奴を伴ひき然るに彼黒奴は見做れぬ地中海の蒼海に乘出するや彼は日々衰弱し悵然として思ひに沈めるが如き様なりしが數日後に至りて彼は精神を失して海

中に飛入りて死せり」と又彼の愛國家及文學者として有名なる羅馬のチツキスは國事犯者として國外に放逐せられし時彼は「羅馬人は我妻乎、我故郷を奪ひ遂に我自身を奪へり」と嘆息しけり彼黒奴や常に見做れし故郷を去りて完く異れる海上に來り遂に自我を失ひたるが爲也チツキスは彼は妻を見捨て故郷を放れて自我を失ひたるに必更に羅馬を出て、國外に放逐せらるゝに於ては彼れの自我は殆ど滅したる也英雄が腸を斷ちて羅馬城外に放つた愁嘆の聲は長く歴史に残りて居る、吾人が社會に於て靜止し活動し生存する所以のもの蓋し自我の内容たる要素あるが爲なり而して夫は國家にして小は一地方の團結に在り國家を觀るの觀念を以て地方團結をなさば其結合は蓋し強固なるべし、

結言

生活に肉體的即ち消極的と精神的即ち積極的との二方面あると同時に生に個體の生と團體の生との二方面あることを記憶せざる可らず吾人は決して肉體的生活を嫌ふものに非ず孔子も衣食足而知禮節といへるにあらずや世の文化に赴くに從ひ生活の程度自ら向上するは自然の勢なり經濟界の發展、資本の増加につれ貨幣

の價值の下落するも亦然り往時の奢侈必ずしも今日の奢侈にあらず黃金積むべし厚食味ふべし美衣亦纏ふべしと雖も其の之を成す所以を認めずして只徒に之を成すは子供の美服を着けて喜び節を得て欣ぶと何を異ならんや世は堯舜の治を歌ひ人は歡樂の香に酔ひつゝある間はよけれど夢醒めて後の悔や已に遲し吾人は再び繰返す肉體的生活は吾人の決して欲せざる所にあらざれども往々肉體に重きを置くの結果却て之を輕くするの愚を學ぶことあり須く肉體の花を咲かしめて精神の實を結ばしめ衣食住其者の生活は飽き易くして飽きたる結果は元氣消沈すること常なり何を苦しんでか意氣消沈たる吾學友諸君よ徒に肉體的に甘じて老成青年たること勿れといふに在り、

吾人は個體の生を輕視するものに非ず個體は團體の分子なれば也個體より成立せざる團體あるを未だ聞かざるなり吾人は精神及び肉體の自我を認識して須く各人の向ふ所に奮進すべし然れども吾人は社會又は團體の一員として生存する間は社會の吾人も團體の吾人も社會又は團體を離れて吾人の完き存在は認められざる事恰も學生は學校を離る可らざるごと一般なり而して吾

「憲法」長物語

人が社會の一員として存在する間は社會には社會の道徳あることを知らざる可らず即ち公徳たるものは是れ也公徳の發達せる社會は優秀の美を放てる社會にして制裁なるものは餘り必要なきに至る公徳發達すれば私徳自ら發達し社會の團結も強固となるべし聖人は天下の心を以て心とするの意味も蓋し遠からざるべし而して個人の發達は分離的にして團體の發達は綜合的地個人の發達は必ずしも國家又は團體の進歩とならざれども國家又は團體の發展は取りも直さず個人の發展を表示するものなり個人は社會の分子也個體の生の重きそれ

團體の生に遠く及ばざること猶小信の信義に及ばざると等しとのみ而して人或は言はる理屈の附方は自由なりと然れどもアルミニウムのあることを知らざる者は金屬は水より重しと答ふべけんも金屬は、水より必ずしも重きにあらざる一斑を見て全豹を評するは正當の道に非ず一事件の顛末をのみ知つて未來國家の成敗を察するは其道に忠ならざるもの也全斑を見て一斑を知るは其誤りや少し茲に於て吾人は再び言ふ迷ふ勿れ個體の生や團體の生に遠く及ばざること遠しと

面倒臭い仕事

或友人が「岩澤(岩澤幹事)は正直に學校へ出たらしいが君は下宿屋の二階組ならう」と云た。失敬な事を云ふない。千里眼ぢやあるまいし、それでも其時分の事を中々た積りかい。と嗚り飛ばしてやりたいが、

學校歸り年中怠け生

待てよ、自分ながら思ひ當る事無きにしもあらずで勿驚或は事實其通りであつたかも知れない。其中でも法律と來た日には生來の大禁物だから覺えもしなかつたし、又實際覺え様としなかつた。(或は二層の事聽きにも出なかつた)と奇麗に白狀致さうか?と云ふ始末で誠に以て御推察の通り學校歸りの金箔も何もあつた

もんぢやあがせんが其中憲法だけは正課だとか必修科だとか試験があるとか無いとか云ふさわざで、大分膽ッ玉を縮められた様に思ふから或は未だ少々位はホトボリが残て居るかも知れん。アテになる話ぢやないけれども、例しにおさるゐをやつてみやうかしら。やりそこないは御愛嬌で御容赦と云ふ所だ。

そこで本箱の底の方から古くなつた憲法の條文を引きさずり出して來て一ッ大に氣取て讀てみる。肝緊の法理とか解釋とか申す方の記憶はサッパリそつちのけて此處ではある教師コンナ可笑しな話をやつた。誰が珍無類の質問をしたなど、愚にもつかない連想ばかり續出する。憲法様の受賣も容易なコツチャア出來ないて。先生の顔の表情、ドモリ方の法則、駄洒落の原則、一時間何回ドモツタか其回数勘定と云ふ様な容易ならぬ研究や統計にばかり浮身をやつした天爵觀面、子々孫々までも勉強はして置くものだとか更思ひ合はされた。がどうも何時まで始めないでも居られまい。先づは参考書でも取寄せますかな。

鵜の目鷹の目

一體憲法様に限らず凡て法律君なんと云ふ厄介なシロ物の文句には只讀ては何でもない、全く以て其通り合點が參る様に思はれて其實なか／＼さうは問屋で御さず、學者先生と申す學生からみれば青鬼赤鬼然たる八ヶ間敷屋の閑人が控えて居つて御無理御尤もの議論の眞ッ最中と云ふ奴が多く、怠け黨のため實に慨嘆に堪えん次第である。

けれども此處は場所柄でもあり（御自身の懷勘定もあり）極めてアタリ前に述べた方が双方都合がよいと思ふ。但成べく新しい説は採用して行きます。なあって？ どうだか？

そこで條文をよむのには大に他人のアラさがし的の眼光が必要なのだ。拙者などは生來の小人好して折悪しくさう云ふ眼を持合はせないのて何時まで經つても物になれさうもないのだて。が兎に角手元調と云ふ所で早速其實例を御目にかけ申さう。まごつかない様御用心さつしやいよ。

憲法には法律と云ふ文字が澤山使てある。所が法律と云ふのは狭く云へば普通用ゐて居る一件でスナハチ案が出來て、議會で決定して、陛下の御裁可を経たも

のを申し、廣く云へば議會の協賛を経ない政府で出す命令でも何でも凡て社會の規定となるものを意味するのだが憲法の各所に用ゐてある法律と云ふ言葉は或時は狭く、或時は廣く解釋をつけなければ分けが分からぬ事柄になつて、つまり一語の兩面使分けと云ふ厄介な藝當をして居るのだ。だから第五十二條に云ふ法律は命令でも何でも包含するし、第二章にある法律と云ふ文字は大抵は狭い方で行くと云ふ一々取調べてかゝらなければならぬから困るんだ。そして學者先生此區別を實質的意義とか形式的意義とか何とか相當の理屈をクツつけて講義の初頂邊からコケ威かしとお出なさるから學生氏愈泣かざるを得ないのだて。

序でに今一つ二つ同類項を御目にかけらば先づ政府と云ふ文字だね。政府と云へば日本の政府そのものに違えねえ。分つてらあ。よせ／＼と御出なさるか知らないが憲法様を研究しやうと云ふ時だけはさう云ふ豪傑式頭腦は差支るので、政府とは一體全體何と何を指すか、果た又誰を指すかと云ふ重箱揚子主義で尻の穴を細く小さくしてかゝらなければいけないんだ。そこで憲法様にオツしやつてある政府と云ふ文字は或個條

國家

では内閣大臣だけを指す様に見え、或個條では天皇陛下も其中に含まれて居る様に見える。こうしてみると分た様な言葉に飛てもない分らない者が澤山出て來るので、憲法に統治權と天皇の大權と二つの言葉を區別して書てあるがコレハ異名同物なんぢやああるまいか。それとも名が異ふのは品が同じでないとするならどう根本的性質を區別するんか承らう。など、學者先生御得意の眞動めかして御座る處なんども勿論此鵜の目鷹の目の實例の一となるだらう。

はて初前置ばかり長く相成申した。愈々條文の説明にかゝり申さうか。が併しその前に未だ是非共々ならなけりやならない關門が二つあるんだて。随分厄介千萬な話だけれども近頃は洋行して國語研究法の研究と云ふ長たらしい研究をする留學生もある世の中、義理にもソイ分我慢さつしやれえ。

關門の一つは國家の説明だ。全體國家と云へば誰でもは、あ知てる。アイツだなど云ふに違えねえんだが、そのアイツとはどんな物かと云ふ一段になると目を白

黒させるより外あえめを。そしち見玉へ。よしそをな
ら拙者が二つ國家の定義と云ふ難有い御託宣を讀でさ
かせやう。いゝか、先づ手短かに云ふと、國家とは一
定の土地を基礎として多類の人々が結合したるものに
して固有の統治權を有する團體なり。だ分つたかい。
そゝに固有のと云ふ妙な形容詞が入つたがこゝは國
家と國家内の州とか縣とか郡とか云ふやうな地方團體
と區別する必要から押込たので、府縣も土地や人民が
あるけれども其統治權は固有でなくつて國家から與え
られたものと云ふとてサヤーンと差別がつけられるん
だ。學者先生の用意も此邊の所は感心と賞めて置か
う。

統治權はつまり命令し強制する權力で國民は背くと
が出来ないものなのだ。そして此統治權の所在は國に
まつて同一でない。或國では特別の地位にある一人の
手に屬し、或國では多類の人々の手に握られる。前者
は君主國で後者は共和國である。共和國を又三つに分
けて三を貴族共和國、二を民主共和國と申す。日本は
立派な君主國、獨逸帝國は實際上少々貴族共和國に似
て居る（表面君主國）、民主共和國は佛國米國それらが

南北アメリカの諸國である。英國も實際上からは或は
民主國であるとも云へる。

事の序でに近頃少々廢つた結合國家と云ふものゝ説
明な仕らう。一つの國はいくら飛離れた處に領地があ
つてもそれは一國であるが苟も組織が別々になつて居
る以上いくら接近して又結合して居ても三つの國はや
つぱり三つの國である。と云へば定つてらあ。人を馬
鹿にするまいと云はれるだらうが、二三年前まで此類
の國家が大分あつた。今でもいくつかは尙殘て居る。
スナハチ二國で只君主だけ共同にして居る同君國、一
國が他國を監督する保護國若干の國々が集つて一の
國を作る聯合國等で此三つが又各二つ位に細
分されるがそれは今は申すまい。兎に角同君國の實例
は現在の奧地利匈牙利國、保護國は四十二年八月まで
の日本朝鮮、現在の佛國と安南の様なもの、聯合國は
獨逸聯邦、米合衆國等である。まあ國家のとは此位で
卒業だ。

憲法

關門の第二は憲法の説明だ、憲法の説明は此「憲法長

物語」を終つてやればそれで明になるやうなものだが、
牙口と違つた茲には憲法と云ふものはどう云ふ物で御
座るとか、其中にはどう云ふ種類があるとか、その法
源となるものは何と何とあるとか云ふ様な憲法と云
ふ品物に就て一言して置かずば到底内容の説明には移
れないのだ。さめい憲法の總論、始まあり。

そこで今一御託宣を讀むからさへ玉へ。憲法とは
國家の基礎となる制度を定める法則で今一審發思切て
四角張れば國家の根本原則を規定する法則なりと云ふ
んだて。

がら考へると憲法は如何なる國にもあるもので何も
珍しく難有派のヨボれる様な結構な品物でも何でもな
くなるのだが、併し普通には立憲國の根本原則を規定
するものと認められて居る。

そゝ一體世間で立憲政治專制政治と云ふのはつまり政
治を行ふ人が誰憚らず思ふやうに斷行するのと、政治
を行ふ人が議會と云ふ様な仕組を許して多少制限を自
分の働に加へるのとの違に歸する。今日では專制國は
先づ無くなりた。少くとも全部無くなりかゝつて居る
と申して差支ない。日露戰役の後モンテネグロ土耳其、

ロシア、波斯など世界にハビヨツて居た專制國も立憲
に移つたし、西隣の老大國は只今正に立憲の準備中だ
ある。此等は日露戰役の間接の大効果とでも申します
かい。

故に憲法には二義あつて、廣く用ゐれば凡ての國の
根本規則、狭くすれば立憲國の根本規則を云ふので勿
論此處には狭い方の意味を採て行くのである。それで
其憲法は分つたとして、扱文字に綴て讀てすぐ分る様
にしたのが成文憲法、習慣に従て別に明文を作らない
のが不文憲法である。不文憲法國は英國と匈牙利の二
個國だけである。

併しいくら成文憲法の國だからと云ふて國家の根本
規則を全部其憲法中に書いて置くとは人力の及ばざ
る所であるから本當に憲法を調べる一段には憲法以外
の法律や、實際上の慣例なども随分引き合ひに出さな
ければならん。例へば日本の憲法には天皇の位を繼承
する順序を書かないで皇室典範と云ふ方へまわしてあ
る。けれどもこれは勿論國家根本規則の「だから説明
止是非憲法の中へ加へる必要があるんだ。此類のもの
は外にも限がない。

それから憲法と法律との關係と云ふ様な厄介なお經をあげなければならぬがコイツは又後へまわし、一つ終に日本の憲法は欽定憲法で人民が革命さわざをやらかして血で作た憲法とは違ふと云ふこと、それから萬一憲法の或個條を改正する必要の起た場合にも天皇陛下から改正の御發議があつて議會に附せられる順序であると云ふことを申して置く。

天皇

いやはや飛だ道草を食た。日暮れて道遠しかね。帝國議會や各學校の講義ぢやないが終は脱兎の如く、一瀉千里といかずはなるまい。よし／＼何でも面倒な所は略し、條文の讀て字の如しと云ふ處も凡て略し、手ッ取早くやらかさう。コレがモンク怠け生には一番都合のい／＼やり方なのだ。

い／＼／＼本文ですぞ、第一に天皇は如何なる事をするものか、其地位は如何であるか。憲法第一條と第四條に出て居る。スナハチ天皇は日本國を統治する一の重要な機關で國家編制上之を最高機關又は國の元首と云ひ、議會とか内閣とかい／＼の機關の上に立て

統治權を總括するのである。第二に皇位繼承は略し、第三天皇の特權に移る。天皇の特權には(一)榮譽權、(二)財産權などもありますが重要なのは(三)神聖保持の權で所謂「天皇は神聖にして侵すべからず」と云ふ第三條の説明である。日本に固有の考から云ても、國家の制度上から見ても天皇が政治上法律上責任を帯びて罰せられるとか何とか云ふのは大々不都合な話である。そこで此天皇の不可侵と云ふ萬國普通原則が立てられたのだ。

第五條から第十七條は後まわし、攝政と監國のことを一言する。攝政は天皇が滿十八年未滿の時か又は精神上肉體上久しい間の故障で政治を行ひ得ない時に天皇に代て統治の大權を執行するもので其任に當る人の順位も皇室典範にあります。監國は例へば天皇が外國旅行などの折臨時代理をするもので規定は別にありませんが之を置くことは出來ると云ふ。

抑憲法長物語も誠に以て長物語と相成て申譯次第もないが、此先、未だ／＼領土、臣民、國務大臣、議會、及統治權の作用即ち立法、司法、行政、それから豫算、狹義大權など、云ふ山鳥の尾の長々しいお託宣のお

登嶽記

森田 治平

美なる哉、雲表に聳ゆる白妙の富士！

紫匂ふ高嶺！

四季を通じて、その清容を見るごとに、絶頂を極めたると云ふ觀念が、腦中に蟠まつて病となり、俗界に所謂、名譽も、繪に書いた山水畫程に効ぬも羨めし、如何なる事ありとも是非一度は羽化登仙の客たらんと、願ひ居りし折しも折り、小金井の本木校長の發案に依る、登嶽連中に加はり、靈山の御力を杖と頼みて、七月三十一日曉の月光を浴びつゝ、嬋々と吹き來るうすら寒き風に身をしめつ、破帽弊褸の輕裝勇ましく旅立つた、同行百六十人、頗る多數である。

我等が今乗れる中央東線は、關東平原より山岳重疊たる山梨縣中に、恐しき軌りをなして進みつゝある、眺めやる車窓の風景、千偏一律、平凡なる山、水の流、茂れる森、蕪雜なる人家、さしてはうるさき隧道などが、隱見應接に暇なき程である、斯る内に汽車は上野原よ

經文を暗誦しなくばならない譯けたからいくら安いと云ふであんまり長いお經は却て會葬者の迷惑、オットいや讀者諸君の御迷惑と觀念仕て先づは今回は此の邊で打切り、又御縁があつたら此次の時も目にかゝります。いや御大儀御苦勞、自分乍ら汗が流れましたわい。

○寢臺

會員 北田政之助

待合室を出て、薄暗い廊を行くと、蒼白い、羸瘦した淋しい顔をした女に出逢つた。

薄暗い診察室に這入つて、片隅の寢臺の上へ仰臥に寝て、熱つと目を閉ぢた。そして、廊で見たあの淋しい女を憶ひ出して、自分もあの様に寝せて居るだらうか？あの女も此寢臺で診察してもらつたのだらう、嘔厭だと思ふと、ヒヤリ冷い物が胸に觸れた。——戰慄して目を開いた——醫師が立つてゐる——着議婦が這入つて來た。外にはまた雨がし／＼と降つてゐて、梧葉の繁りに暗い色が動いてゐた。

り、猿橋、鳥澤、大月に漸く着いた、着第一に滑磐なりしは、觀迎小金井生徒團體の小旗を立て、頻りと吾々一行を招待せしにある、かゝる事と豫定中非ざるを聞き居るので、不思議に思ふて居ると、豈計らんや、奸商の好手段、不當の茶代でも貪らむの計略と知つては容易に承知も出來ず、速刻、大悟せしめん考て、それには空腹で渴きて居る場合であるから、忽ち座敷に通ひ、茶を呑み、菓子を手付けたり、數盆、是れで良しと腹の蟲やうく鳴りを沈めしを幸ひ、霞の裡に消え失せた、後に聞けば、巡查と店主と大議論したとの話してあるが、斯る人間が塵の浮世に多いので、楽しい切角の旅行も、題なしになることが多くある、誠に残念ではないか、殺風景なる事に大分時を費やしたので、急行、桂川の頭、水力電氣の本源たる、古川渡し、水量事務所を眺めつゝ、谷村町、小沼などを通つて吉田に附いた、時計を見れば丁度午後五時で、町端づれの彼方には、翠黛の不二山が天柱となつていと鮮明である、吉田なる渡邊氏宅に、着早々、入浴し、飯して後、潺湲たる流れを耳にしつゝ、他郷の見果ぬ夢にあるがれた。

翌る朝三時、起き出で、愈々、登山すべく用意萬端、草鞋の紐固く結ぶ、四時過ぐる頃、渡邊氏を先達、吉田を出發し、淺間神社に參詣すべく沈靜なる境内に入る、鬱蒼たる深林中、寂寞凄然として、只々、天風の音のみ高く、天心には一痕の鎌月が、淡く有明の空を照して、木の間隙ぐれに一行の前途を守護する如くである、宵暗に林の道を探りつゝ、樹木稀れる曠野に出た、行手の方を見上げれば、容姿艶麗なる玉芙蓉が、朝の冷やかなる山氣に、更に威嚴を添へたかと思はれて、敬虔の念は禁じ得なかつた。

瓜先さ上りの道を辿りつゝ行程に、太陽は足柄山上を離れて、水平に吾々に光を浴せかける、裾野の方を看返れば、緑の林、赤き山、暗碧の湖、金波閃めく河などが、水彩畫の如く、路傍には桔梗、女郎花、荊薺、釣鐘草など種々雑多の草花が、自然の手に培はれて、千古緑なる松と相點綴し、萬斛の露重げの風情、いも言はれぬ趣きがある、馬返へしにて、草鞋の紐しめ直し、威勢好く六根清淨を唱へつゝ、鳥居を潜ぐつた、つゞら折の路、樅、羅漢松、石楠木などの太き枝に蔽はれて前途眩暈である、一合、二合、三合目も

難なく登りて、大樹の切り株に腰を降し、暫し憩ふた、鳥の聲耳元に落ちて見上げれば、千仞の絶壁、百尺の老樹の聳え、て天も左程高からず、樵夫の歌足下に起りて見降せば、萬かつらを傳へて渡るべき谷間に、腥々風颯と吹きよめきて、萬山自ら震動す、遙かに來し方を見返れば、崢嶸たる途何處にかある、寸馬豆太のみを彼れかと疑はる、益々登り登れば、眼前豁と開けて曠野に、意氣頓みに昂りて、磊々たる奇石怪石の間を、白霧を排じつゝ進み行く、七合目にて三時間はかり休みし後、少しばかりの荷物を托して、更に、英氣を振、峻峻を攀ぢ、此處に至りて金剛社の効力を認めぬ、氣息奄々として肺搏甚しく、五歩小息、十歩にして大の字形に寝ると云ふ仕末、吾ながら意氣地なさものと云ふ了せた、仰げば絶頂は依然として黄ばんだ淡雲中に見える、此時とと思ふた、聞きしより見しより思へしより、登りて偉大を感ずるは富士の高嶺である、たゆたいに歩みつゝ、胸突入丁の峻難に差かゝる、下界を遠く離れるに従つて氣温は次第に寒く、力杖を持つ手も凍つて屈伸の自由はなくなる、既に降りつゝある人達を見れば、酷寒の衣裝その儘で

ある、余も褌衣一枚を持參して來たのであるが、七合目の岩室に置いて來たので着ることも出來ぬ仕末、尙も攀ぢらんと欲すれど、寒は襲來する、身體は頗る疲勞したので、登るまいかと思ふたが、九仞の功一簣にして缺くも残念である、まゝ運命を神に托せんと、畢生の勇を鼓して程を續け、僅かに一萬二千尺の頂上に到着した、取敢えず本社に參詣す、巖室の中に社を設けたので、神燈は不斷の光を放ち、外面には靈旛幾旒、片々として風に翻つて居る尊さ、その近邊に三四の岩室が並び立てられて、空中異様の町をなし、霓裝羽衣の客が集散して居る、嶽頂噴火院の周圍に列び立てる十三岳は、皆奇異の石山で、此内劍ヶ峯は頂上の平面を抜くこと三十丈富士の最高點である。

蕭條たる風の少し劇しいので、岩影により遠く彼方を眺むれば、二荒、筑波の諸峯、煙霞を含み、麓を望めば、足柄、箱根、天城の山系、伊豆半島となりて太平洋に突出し、湛然たる瑠璃色の海上には、金帆の浮動して、誘惑多き、人世の競争園内を、のがれ居るもの、如く、又、青空を仰げば、斜なる夕陽、山の半面を照して將に紫雲驟くその内に、平和の光を納めんと

するものゝ如くである、此宇宙の壮大、無邊、崇嚴なる形狀に、思はず無念、無想の禪味を覺えて、心魂恍惚として奔放なる熱情を挑發せられける、此刹那、感得す、多年の心願成就せるを！、現前の雄壯なる自然美にしばし見惚れて居る内に、白雲起るよと見る間もなく、一面の綿の海、濃淡錯錯せる灰色の海と化して、湧きかひる波濤身邊に迫りつゝある、下界は大方此海の底なのであらう、俯して内院を望めば、立ち迷ふ雲の晴れ間より、幾百年積れるかの雪が、ほの白う見ゆる、銀明水、東安の河原、このしろの池、雷岩、金明水などとは、も鉢廻りの途中自然に巡覽し得たものである、頂上の寒威凌ぎ難きに制愛して、急行、七合目に下り二泊した、既に日は綿の海の中に没して、天空に碧、星光まばゆきはかり、空中の夕暮は寂寥の感いと、深きものである。

半宵仙夢破れて、何時頃かと聞いて見ると、四時頃でもあらうとのと、そこで急いで支度し、草鞋をはき替へ、岩室を出た、明けやらぬ空の殘月白く寒げなるに、思はず身震しつゝ、足元をよくよく見定め、洲走を降つて行く、抑も、洲走りと云ふは外でもない、大

きさの揃つた砂礫で、一度足を動せば留めどもなく降る、勢に乗じ二層の力をこめて走り降るまでのことである、草鞋はすぐ切れて仕舞ふから二つも三つも一處にくく付るのである、余は、あまりの面白さに、一氣呵成、三十分もたぬ間に降り盡し、小御獄山に上つた、此處で一行勢揃して、寒帯林中の細道、根と根と相交錯して歩行に困難なのを辿りつゝ、萱原蔽へ繁れる平野に出た、涼々たる流れの溪川にて汗を洗い、吉田についたのは午前十時頃である、渡邊氏の庭前にて記念撮影をなし、芽出度此行を終へた。

阿須山奇崖の探勝

清水 芳雪

一 途上の光景

花散りつくして今は唯初夏の樹々の梢より滴り落る緑葉の車吹く風もそぞろ心地よく胡蝶は飄々と輕き翅に夢を包みて夏草より夏草を渡り鳥は樹間に歌ひて野末を行く雲淡し。

初夏の野何ぞ詩的なるや僕はかゝる野末を眺めつゝ、

かのヨーロッパの野邊を想ひ古ヨーロッパの朝を畫きつゝオツウオルスの詩集を繰きつゝある折柄突然親友數氏僕を訪れて明日阿須山の奇崖を探勝せんと計るさま、の天氣豫報は大丈夫降りしやとさまつていよいよ明日は出かけるともさまつた。

そうするとも暮れるにも近いから用意をして置ねばならぬ帽子ハンケチステッキスツクグイトル草鞋それと母に頼んで頭大の握飯二つさてこれでよいと夕餉を早くから済して宵の内からベッドの上に横にころり朝は早く立ちうといふので二時過ぎには必ず起きてよと目覺時計に頼んで置いたから大丈夫とふと胸に浮いた明日の旅路の一首。

早立の宵約束や夏の旅

いつしか眠りについたた、いさしいベルの音に目が覺めた忽胸に浮む阿須山行あゝ左様ぢやと飛び起きて早速顔を洗つて来ようと手拭楊子を手探りに取つて未だ夜半だから皆の眼を破つてはならぬと足音靜かに勝手に出ると母はもう早くより起きて茶を煮て待つてゐて下さつたので顔洗ふ水までちやんと汲んで御飯も有難く頂戴したので成べく身輕に旅装してそれでは行つ

てまゐりますと雨戸一枚開けて戸外に出れば空は一面濃藍を流した様で其中に無數の星が輝いてゐる朧幽かに恰も薄墨でぼかした様な高萩山はいつ見ても美しいが今夜は殊に艶いて稻葉に上つて露には目が宿つて思はずあゝ美しい玉がと兩手が出そうだから集合所にと着いたすると血氣の青年等は僕の來るを今や遅しと待つてゐたのでそれでは早速目的地さして出發した。

前の小橋を渡つて田甫を過ぎ國道に添へる松並木にかゝつた老杉古松陰鬱と繁茂して晝猶暗き所殊に夜の事とて甚暗いと語り合ふと遙か遠

忽驚大蛇道當横 抜劍欲切老松影

の微吟が朗に聞えた

色かへぬ松やむかしの御成道

明治維新前徳川家全盛時代日光大廟御參詣の際シタシニの整姿の聲勇ましく通つた儂があらゝ見えそれより根岸を過ぎ笹井の竹ヶ淵に來たまつて一休みと芝生に腰を下して胸を寛ぐと眼下を流るゝ入間川の早瀬の音は僕等を歡迎の音樂でも奏づるかのように振る臨のこゝろとした森の中では天女の金の鈴でも振

かの様な蟲の聲今までは急いなので非常に暑つかつたが、この名高い淵の風に吹れたので最うひや／＼して來た夜は次第に明けそめた鶏の聲があら／＼こちらに聞えるはや、歟を肩に大矢伸の人達が薄く里を包みまゝ女神の装の模様の中にかくれたまはつ／＼始めようかと野田より橋を渡つて佛子より西の方山を越すといつの間にやら／＼さつた朝はさだ早い六時頃だ／＼路の兩側は崖が押寄せて其の下を流れる細溪はがさ／＼熊笹を鳴らして冷めたい曉風と何事か囁きあつて時々生息の息が鼻を掠める青葉の隙間から恨めしいと謂いそ／＼な朝日が現れて何處から出て來たか一片の黒雲恰も僕等を狙ひ隙あらば飛び付かんと構へてゐる様だ折／＼しも折過去冬の夜此の山の上でうら若い女が眞裸で松の木に括り付られて凍死してたといふ話を思ひ出した／＼何だか上の方でなる様な聲がする様だ其の道路羊腸として歩行は思ふ／＼に掛りぬ困つて矢先にこれが死人の涙でもあら／＼か眞に冷めたい車が襟首にぼつたり僕はアッ／＼叫んだ／＼其の聲が丁度鬼人の嘲り笑ふ如く山びことなつて響き渡つた願れば岩石巖々恰も鬼神の立てるが如き四方の山々は遙かに彼方

翠色滴らん斗りの青山の頂紫雲ばつと開いて金光燦爛あゝ美なる景色なる哉

一 奇崖の眺望

削つた様な斷崖の底は寄せ返す荒浪が絶え間なく巖を噛んで碎き盡さずば敬ま／＼との様に物凄く叫んでゐるが流石には夏の川だけにゆつたりとしてゐる山上に立てば見渡す限り渺茫として際涯なく水天髣髴何れを何處とさす／＼すべきものもない一望千里自眸の中に集り來る絶美なる百萬石の田浦北を望めば日光妙義山脈少し西の近くには秩父山脈の枝脈たる郡中第一の高山目和田山西には由縁ある天覽山多武峰山西南には駿甲相三國一の美容神歌たる芙蓉峰こゝ入間川の沿岸加治村阿須山の奇崖岩角峻として秀づる所い／＼洞穴の近くに來た入口の右手に藁屋根の家が唯一軒あるばかりそれ／＼堅く閉してあるこの洞穴は合計十二三あるをうてあるこれは過去アタシを掘り出せし礦窟である入りて見／＼と蠟燭を點けて少しばかり入ると火は忽ち消えて眞闇となつたそれからマツサで點じ様としてゐる如何にせん點かないから奥深う見究める事ができない

つて洞内より出てしまつたあ／＼實にい／＼な穴だ吻と一息ついたそれ／＼山を下つて僕等は危い巖角を踏んで端然として佇立んだ今しも紅色を帯びた夕陽は次第次第に傾いて西山の端三四間にして隠れんとしてゐる見／＼候ち一道の金光を引き來ることを武藏野原頭幾百里青波動き風かほる魚鱗幾千萬群り跳り出し／＼と疑れるや／＼がて見る間に其太い長い金光はや／＼光を攸め四方の空は櫻色に匂ひ殊に西方一入色めき／＼中空高く浮べる幾群れの雲はさ／＼の愛らしい色を競ひ水面亦くさ／＼の麗しい色に光り行くのであるや／＼がて夕陽は山上一尺斗りの所に落ちて來た光線の射映次第に収まりまばゆき眞紅の火の球の色は今まさに極點に達し恰も一大團のルビ／＼かと疑しめた此時夕陽に照らされたる森羅萬象皆異様の色を帯びてゐる水面は紫にうつろひ或はと／＼に彩られて夕雲の影を宿して淡紅黄橙柿樺と遠く近きに様々／＼なかなた原野田浦山林は紅紫色に染めつけられ次第に紫より紺紺より藍色に變じ又僕等が立てる後の巖或は僕等が衣手足などは却て紅に燃し立のである。

て鳴き渡り或は牧童の笛の聲勇しい筏のりの三々五々節面白き咀をして漕ぎつれて行く願れば僕等の影は三十丈斗りの高坊主となつて巖より巖を這ひ行くなど一として面白からぬはない其のや脚下には風薫るかくて恍惚と自然の神の微妙なる筆もて畫き給ひる聖く尊き麗しい生ける繪畫を眺め入る程にいつしか夕陽は吸る／＼様に山の影に這入つた華やかなりし夕陽の色も醒め酔ふてゐた様な山や僕等が身元は元の色にかへつたのである間もなく東の山の端からは鉛色を呈した春霞の如きもの刻一刻西方へ廣がり來て淡く吾が世を包み後の山は灰色に變つた此時雲を破つて二つ三つ糖星がきらめき／＼そめた雀や鷗は何處に宿つたであらう山も人の影も悉くなくなつてしまつたかくて夜の色はまた吾が世の一面を領して天も山も烟も亦一種の美しい静かな趣味ある景色とはなつたとして巖角を噛む髣髴たる浪の音はい／＼／＼猛り狂うて獨り寂寞を破つてゐるのである。

人は炎熱に苦しめど吾れは夏日の永きを愛すは誰が言ひけんその永き日も惜いかな早とんぶりと暮れて觀音寺の鐘が遠くかすかに一杵二杵……又三杵鳴つ

たのでこつそり山を下りてぶらり／＼と歸途に向つたあたりには面白い蛙の歌が間斷なく湧いて来る程なく見知らぬ山の頂に月が出たをして淡い／＼清い光の色は森も野も山も田も畑も乃至はついで其處のこんもりとした森簾までさながら無邪氣な夢の様に眠つてゐる田舎の夏の夜は實に趣味あるものである今日ひねもす美しい白い腕や脛を洗つて苗代小田の水の小せき越えてちよろ／＼とせ／＼とせ／＼とせ／＼と思ひ出した様に螢火二つ又三つ又四つ五つ六つとたん／＼殖えて來て四邊一面火花を散らす様はては僕等の衣の袖にとまるもあかしく折から風はそよ／＼

お月様いくつ十三七つなど稚き謠を聞く時などは實に羽化登仙の思ひがするまゝ兎も角も愉快であつた。

偶言數則

松下操

大觀念と小精神

亞弗利加中央部に棲息する一黑人を引連れ來りて文明國の科學の進歩を見せたらんには彼は自分の周圍を圍繞する自我觀念を離れて遠く異國の風物に接し忽ち

驚嘆禁ぜざらむ更に彼をして最大急行の汽車、最大速力の飛行機に乗せしめたりと假定せば彼は全く自我觀念を失して遂に眩暈氣絶するに至るべし。千里を行く覺悟なくんば八百里を完全に行き事難く五百里の道を駛する決心なくんば三百里の道を完全に駛する事能はざらむ。大事を成す心得なくんば小事を果すこと易々たらざらむ。

人は凡て己れの地位、境遇、範圍よりも更に高き地位を見更に大なる境遇を思ひ、更に廣き範圍を豫想するにあらざれば現時の地位、己れの境遇、目下の範圍に於て充分其職責を果す事蓋し難かるべし。師を愛すれば宜しく校を愛する觀念を以て師を愛すべく、郷里を愛すれば宜しく國家を愛する觀念を以て愛すべし。凡そ大觀念ありて始めて小精神を完全に發揮することを得るものとす。

上解けのする國民と

底解けのする國民

英人の底解の國民なる正に佛人の上解の國民と好コントラスト也。佛人は熱し易すけれども又冷へ易し英

人は熱し難けれども又冷へ難し佛人は事が解り易く英人は分り難し佛人に企業者多けれども又失敗者多く英人に企業家少なけれども成功者多し。佛人は感情的なれども英人は條理的也佛人は物の容積の品質を見れども英人は物の重量、効用を見る前者は上より見後者は側面及下より見る前者は流行的なれども後者は保守的也。我國民の上解的なる正に佛人の類乎吾人青年の覺悟夫れ果して如何。

國民の元氣

國民の元氣は青年の元氣に在り、地方人士の草鞋の痕にあり、握飯と梅干とに在り、粗服に在り、濁酒に在り、徒歩に在り。日魯戰爭は握飯と肉との戰爭に在り古人の言に「人咬得菜根則百事可做」と今後の國民は握飯と梅干とに満足し得るや否や。

勞力と遊戲

行爲其者が或目的を達する一手段たる時は吾人其行爲を指して勞力なりと呼び、同じ行爲も手段及目的なくして只其行爲が愉快を感じしむる時は吾人之を稱

して遊戲なりと叫ぶ。

漁夫の漁魚は勞力となり、世の閑人の釣魚は遊戲となる、病者の散歩は勞力即ち苦痛となれども健康者の運動は遊戲即ち快樂となるべし。

然れどもものは精神の入れ方、心の置き方で如何様ともなりぬへし古人言はずや勉強從事不敢告勞と然らば人皆其職業に従ひて勉強せば苦痛を感じること少し學者の一生を遊戲の中に送るも其理茲に存す。

中ブテ主義の外交

風に柳、暖簾に腕押の喻も物古し。人高しと云はゞ高しと言ひ、低きやと問はゞ低しと答ふ。主義あるが如くにして主義なく、主張あるが如くして主張なく、見識あるが如くにして見識無し愚鈍らしく見えて意外に機敏、敏活らしう見えて意外に遲鈍なり、捕捉する所無く又要點なし口角泡を飛ばし、氣慨天に宙するてもなければ舌頭往々人を殺すことあり恐るべきかな、此外交に勝ち得るものは誰ぞ外交の困難なる實に茲に在り。

瘦我慢の説

「武士の子と云ふ者は腹が減つてもひもじうない」武士は食はねど高楊子」これは最もよく余の所謂瘦我慢を説明するものである。近頃流行語の武士道も之を詮じつむればこれ瘦我慢なりだ（と余は思ふ）。徳川の末世に流行せし男伊達も亦瘦我慢なり。

かのストテ學派の教へし所も其動機は矢張り瘦我慢なりと思はる。古よりの忠臣義士見様によりては尙瘦我慢の結果なりとも解せらる。余の見にして大過なくば忍耐克己武士道等皆一の瘦我慢なる語にて盡く（否か）。

大石義雄若し瘦我慢なかりせば必ず復讐の結果は見られざりしならん。楠氏の一族よく南朝の孤壘を支えて數十年なることは亦瘦我慢與て力ありてはなないか。ステツセル一朝瘦我慢つきて歴史に汚名を印した。

余は敢て言はんとす。瘦我慢は成功の秘訣なり。顧るに今の青年は餘りに瘦我慢のなさ過ぎるに驚く。彼等はオキに學者ふり、煩悶とかシヤグリーンとか言ひだす。其癖其煩悶なるものにはオキなものはない。試験

に落第した位が上等の口で少し落ちると許婉が死たとか最下等になるとラバーに逃げられたたと云ふ類もある。

そこで此等煩悶宗の人々には各自皆信ずる本山なるものがある。或人は華嚴宗を信ずる。華嚴宗の本山は日光にあつて開祖は藤村上人なり。

某生は淺間宗を信ず。本山は信濃にあり、開祖は今記憶せず。

某士は耶馬宗に歸す。嘗て山陽に詠せられしを以て名あり。今耶馬宗の本山となる。煩悶宗の巨擘なり。

煩悶宗の一派に鐵道往生宗なるあり。又井戸身投宗なるあり。是等は他力本願を主とし概ね教育なき者の歸依する所である。されど有識の士にも間々之に歸依するがある。

あら笑止や。今の青年は餘りに信仰心多きことよ。併し余はこれに一の疑問ありだ。是等の信徒は獨り青年のみならず、随分四十を越した分別盛の人迄も居る様だ。

新聞記者などにも變な人がボツ／＼見える。何故かなれば藤村操などを褒め立てる人がある。某雜誌の如

きは操の書きじとか云ふあの癡言（俗に華嚴の銘）を態々日繪に出して置く。如何に口繪に困ればとて外に何かありさうな者だ。近頃日光ではこの癡言を繪葉書にして賣で置く。論語だつたと思ふ。其智や及ぶべし其愚や及ぶべからず」と云ふ語があるが、全く世の中には馬鹿の種類が限りない。

處が上には上があるもので、此癡言を暗記してをる者がある。もう斯うなつては日本語では馬鹿さ加減が表はせない。英語でもチット六つかしい。

併し彼等の身に取りては其開祖の箴言だから之を唱へるのほ恰も日蓮宗の人が南無妙法蓮華經を提唱するのと同じかも知れぬ。

だから彼等の目から見たら余は當然異端である。ヒーズンである。若し余をして操の記事を書かしむれば斯うだ。

「あるかなるものてありけり。名をば藤村の操となん呼びける。なにがしの學校とかやのわらはべなり。おのて今年十歳あまり九つばかりになりけり。如何なることはりのありけるにや、ひと日ふと見えすなりぬ。身うちの者、友どちなどあはてし、そこで

遁世閑居の決心

となくさかせとすかただに見えず、人々せんすべなくて、いと困し果てけるに程へて日光の瀧とかやに人の死してありけりとうはさするものゝありければ行きてみるに正しくこのおのこなりけり。味氣なさことしつるものこかなと人々言ひあへりとぞ。あるかなるものはあるかなることなすものにこそ。今の青年は諸君は憲法によりて信教の自由を有す。諸君の信仰必ずしも理由なからず。されど余は諸君に言はん、煩悶は決して諸君を光明に誘導せざるなり。願くは瘦我慢をせよ。余は老人なり。惡しき事は言はざるべし。

居逆境中周身皆鐵衞藥石砥節厲行而不覺處順境內眼前盡兵仗才矛銷膏靡骨而不知

（榮根譯）

遁世閑居の決心

安部 立郎

僕は數年前からの希望を實行して今日只今から僕の所謂遁世閑居の生活を試みやうと思ふ。が其意味や其理由やに付ては一應説明を要する様と思ふ。

僕は自分の性質の自由に敢て先祖までを引合に出すまいが、僕の面倒臭がり性は僕一代に始たことではないと思ふ。僕には世間一般の生活を試みる傳習的傾向は大に缺乏して居ると信じて居る。

僕の身體は昨年大打撃を受けた。殊に數年來の無理も大に手傳て居る。之を恢復させるには時日を要する、或は一切の活動を停止しなければならぬかも知れん。僕は何でもかまはない。

僕は養生の傍氣樂に氣隨に且氣永に何か研究の一つもやつて行けばよい。名譽とか成功とか云ふことを始めから眼中に入れてかゝらなければ餘計な頭痛も起らない。

僕はゆつたりと考へて居たい。

僕の兩親は老た。姉妹は散た。家には僕一人だ。少しは親と一處に暮して居ると云ふ感じも起したい。

僕は自然にも接したい。

僕は社會の穀つぶしだ。そんな穀つぶしは死て了へると云ふ人もあらうが太平の日本國に穀つぶしの一人位あつたつて差支ないだらう。

終りに遁世閑居は頭を丸くすることではない。全く

此の世を離れた死學問をすることでもない。厭生思想——霞水君の所謂煩悶宗信者となつたわけでもないことをこはつておく。(二月十一日)

地方青年團體に就て

△本號には是非郡内の各町村青年團體の事を掲載しやうと思つて居たが何を云ふにも實際の處本會の中央部に人手が不足なので到底をこまて調査が及ばなかつた。故に唯斷片的に聞込た事を二三記すに止めやう。

△川越町の一區小仙波には土地の舊蹟にちなんで明星會と申す青年團體がある。會員が七八十名で新聞雜誌縱覽所を消防用具置場の横手へ新築し、ナカ／＼味をやつて居る。集會も隔月位にやり正月とお盆には大會も開くさうだ。殊に今年は道路とか何とか云ふ様な村の營造物にも大に改良を計る様手をまわすさうで誠に結構である。

△所で此會が起た爲に小仙波區に博奕をする人間が一人も居なくなつたと云ふ目出度い因縁は始此會が出来て色々の規約をした二三日目であつた。やつぱり好きで廢められぬ誰彼三四人が集て惡戯最中、急に警察の

手が入て連中悉取られた。所が家の者は翌日に至て始て事の始末を知り、ワルサをやつた連中も警察で青くなつてビックリ驚天してこまつた。それを會長の岩澤新平氏と其父で小仙波の區長をしてゐる寅吉氏の盡力で救ってもらつてハテ扱モ一博奕ばかりは死でもするもんぢやありませんと此處に小仙波中此ワルサの根が絶えたとはい愉快々々。

△未だ各地の青年會に就て調べたならば此例は少くないと思ふが兎に角青年團體は是非共一方は規約の勵行一方は高尚なる趣味の養成と云ふ兩方面から善良な氣風を作る様にしてほしい。

△て去る九月四日の本會大會で青年團體の優良青年を撰奨した一事は不少青年の奮發心を刺撃したとみえ、其後見違へるばかりに發達した青年會もあるさうな。

△現に發智會頭の霞ヶ關村では二つの大きい字が對立して居る所から何時も巧く行かなかつた青年會がメツキリ改まつて大分好成绩をあらはして來た。コンナ例は外にもあることと思ふ。今年はや十分研究して改良された團體は改良されたものとして大に其美點を全郡に發表しやう。

△東吾野青年團は前からナカ／＼シツカリやつて居たらしい。圖書閱覽所などを數ヶ所に設け、飯野團長、淺見、栗原などの幹事諸氏大に盡力されて居る。此夏なども大會を開てナカ／＼盛大だつた。尤も飯野氏は昨秋以來病氣で飯能の病院に居らるゝと云ふ話だ。是非速に恢復して再び奮勵されんことを望んでおく。

△一寸シロウト考かも知れないが入間郡全體をみると割合に西の方の山に近い村落に開明的の青年團があつて、豊岡から所澤邊の南方の村落之に次ぎ、川越附近は概して面白く行てない様に思ふ。

△先達も毛呂村の小學校同窓會に一寸見物に行て來たが學校の設備、會のやり方、ナカ／＼以て川越邊の團體を後へに瞠若たらしむる趣があると思ふ。

△て何にせよ。一つ各地の青年たるものは先づ自分達の事は自分達で始末すべしと云ふ自治の原則を考へて、年寄の世話にばかりならずと云ふて何處までも年寄を尊敬し經驗家の説に従ふ様にして團體の經營に當り、銘々少しづゝの我慢と少しづゝの勉勵で以て將來の國民たるの素養を作らるゝことを希望する。

△殊に土地には夫々の情實もあり、ナカ／＼六づかし

い關係もあらうが其處は大なる必要の爲には必ず小なる事情を棄てる心掛で互に折合ひ調和し合て立派な効果を擧げる様にされるがよいと思ふ。

△役員とか権力とかは例令一方の字の人々に譲てしまつてもよいではないか。→時は縁の下の方持ても長く力持をさへして居れば社會が之を認めて呉れ、自然に誰と云ふことなく自分を立て、呉れる様になる。僕は相互讓歩の調和主義でなくては青年團體の事は成功せぬと思ふ。

△それなら門戸開放で何人でも志のある青年は皆加入させるのみならず（不都合のため除名した者などを別とし）幹部の任に當るものは公平に凡ての會務を處理して行かなければならぬ。此公平を失ふと忽ち團體は混亂してしまふと思ふ。

△ふれから會員は決して急いではいけぬ。一の團體の進歩と云ふことは容易なものぢやない。色々の事情に應じ色々の分子を包含して段々最後の目的に達しやうと云ふのは一年や半年でと云ふ様な氣早なやり方は失敗の基である。慎重なればならぬ。

△要するに僕は青年團體は開放、調和、公平と云ふ三

主義で將來の國民——世界の一等國たる大日本の國民の自力修養、自力教育の機關として十分に發達せんことを切望するものである。

雜誌談

△今日は一つ幹事連の棚あらしをやらう。と云てナニシロ三十人からの總勢であるから手前の様な新參者にはナカ／＼性質はあるか、未だお目にかゝらない人さへある始末だがまあ知てるだけポツ／＼始めてみる。

△いろは順で行くと第一番岩澤新平君、早稻田出身の文學士で女學校の教諭、川越町の青年ではチャキ／＼だ。殊に仙波明星會と來ては全く以て同君の力一つであの好成績を擧げ得たと云ふべしだ。

△故參と云ふ方から行けば先づ大澤重君あたりは第一と云はれる第二には落ちぬ方だ。當代の才子、南畑村あたりは埋めて置くのは惜しいもんだ。チット都の方へ出て一活動あつては如何に。

△入間川の神田光平君と川越の鈴木清太郎君とは一寸好い取組だらう。此神田君に就いては小生初對面の時倫理上の大問題を論じかけられて大に參らされたこと

があつた。チカ／＼のクセ物だ。

△鈴木君も亦一クセあるらしいが外に又俳諧など云ふ風流の嗜があつて話もよく分る。義侠心もある。それがため時々人から飛だ誤解を被ることもあるが兎に角鈴木君即ち幸村宗匠の人物を知てみれば親しむべく決して惡むべからざるものが分るであらう。

△奇抜なのは（外にも同類はあるけれども）先づ指を須ヶ間運治君と發智神太郎君に屈することが出来る。此兩君が去年、あたり並で歩いて行く風體と來たら到底探偵の尾行を免れなかつたシロ物と思ふ。既に兩君で僕の家を訪はれた時なんぞ、僕の家のは門前拂ひを食はせやうとする所だつた。

△そこで此發智君一名カアチャン君に就ては滑稽な逸話が澤山あるけれども、かけまくも川越梁織學校教諭となど申す尊い地位に對して先づ此處では發表を見合せるとして、一つ是非云はねばならぬ秘密通信は、一昨年君の年齢を去る仁が判斷して四十歳以上と斷言したぜ。それでは會頭と下ツチがオドロサンだか分らなくなりますよ、太に若返らせ玉へ。おなかしこ。

△今一つ皮肉な紹介をしてやらにやあならぬのは澤

田文二郎と申す畫家、此人至て無愛憎、至て無頓着で昔の畫家にもありさうな性質、だから始めて會た人は忽ち怒てしまふけれどよく其人を知てみれば無愛憎の中に愛嬌なきにしもあらず、無頓着の中に一種の風流なきにあらず面白所も分る。畫は西洋畫で肖像は得意だ。腕も進歩して行く所が吾輩シロウトにも見える。思召の方は一つ頼んでやつて下さい。ては皮肉にも何にもならないか。

△それでは一つ秘密を漏らさうが、一昨年此人と秩父の去る友人の家へ行て居た時、二里ばかりの山へ行て歸らうとするのに日の暮れるのを忘れて寫生をやつて居つたには僕實に閉口したつけよ。もゝ其時は畫家と全行は禁物々々と決心した。

△所で幹事二十五人中、最大はタシカ發智太郎君、最小は勿驚早稲田大學商學士松下操君にちがいないと思ふが發智君は現在二年志願兵で宇都宮兵營内でギウ／＼めめられて居るから勘辯するとして、忤許し難いのは松下の操君、一體全體君はモゝ少し大きくなれなかつたかいは如何に。

△尤も君もネゝ近來は大きくなつたよ。小さいと云ふの

は今から八九年前小供の時分のだ。怒つちやあいいけないよ。小供の時分は誰だつて大さかありませんやネ。とは上げも上げたり下げも下げたり松下君たるものハダシで逃げ出すの外あるまい。

△然るに此處に大きい方にかけては發智君に劣らない先生がある。有名(何て有名だか分り申さず)なる安部君是也矣だが、或時松下君つゞく安部君を見て「大男其身に智慧もまわり兼ね」とやつた。すると安部君即坐に「豆粒は其身の智慧も知れたもの」とヒネクツた。さ。オットこれは飛だ落語で失敬。

話の話

△郡内の去る小學校の先生に知り合があるから「何か珍聞はないか」と問合せた所、「ある」と云ふ冒頭で返事が来た。

△其一には欠席届のとを入學延期届と書て本文に「右者私〇〇儀去る〇日頃より眼病事故の爲入學出席致兼候に付右の趣を以て此段御承知相成度依而御届に及候也」とあり姓名の上には丁寧にも「入學延期届人」と銘

打てあつたとの事。

△それから或時「チブス」で休て居た生徒の父兄が来て病氣も全快したから登校させてもよいかと問合せたから一人の教員が「も一熱はありませぬか」と尋ねると、其人答へて「チーモ一三十二度五分で有ます」だと言。△日曜に上京すると汽車中田舎のかみさんらしいのが全じく娘に向て「日曜でせあえーコンネーに込むんだからあはえの日にやあさぞヒドかつべえにえあー」だと言。△此女の日曜の定義こそ聴きもんだで。

△縣下有數の去る富豪から古雜誌五六十冊を寄附して來た。スルト數日經てから其家の番頭が來て受取を請求した。雜誌をみると四十年前後の女學世界、中學文壇、實業日本が飛び／＼にコレを一號アレを二號と云ふ様にしかなかつたとの事。



會報

○評議員幹事及會員有志者新年會

四十三年一月四日午前十時より川越仙波喜多院の奥座敷にて開會、定刻前十數分綾部惣兵衛氏を先登として荒井定次郎山内庫之助齋藤小十郎池谷佐輔の諸氏續々來會し、發智會頭飯沼正己氏も次て來着、遠賀亮仲師も列席し、大澤、岩澤、松下、繁田、安部の諸幹事、栗崎記者、大澤、發智、繁田等の有志會員諸君亦來會し、二三の協議ありて後は懇談に入り、綾部氏の快談、遠賀師の述懐、會頭の笑聲、若手會員の容態等なか／＼の坐興にて散會せるは午後四時を過ぐる頃なり。出席者約三十名。

○幹部慰勞會

新年會の散會後發智會頭は幹部一同を川越南町山屋料理店に招きて慰勞の宴を張り過去一ヶ年の盡力に報ゆると共に今後の奮勵を促し、幹部の一同壯に氣を吐て

愉快に宴を徹したるは午後七時半なり。

○會報發刊

一月十五日會報第一號を發刊したる所四方の要求ひきもさらず千部の刷物十日ならずして殆ど一冊を残さず。依て二月十五日再版千部を發刊して僅に需要に應ずるを得たり。

○幹部の會合

一月より二月三月に亘て幹部の會合再三行はれ重要な協議もなきにあらざりしが、兎に角九月大會の折までは特別に大なる活動を試みざるに決したり。

○大會の準備

七月に入てよりは遽に活動を開始し、優良なる學生の爲にする奨學資金の募集(即贊助會員の勧誘)を始めとし、普通會員の勧誘、評議員幹事の増加、大會に招待すべき名士の選擇及依頼、優良學生及青年選奨の調査、大會案内書の印刷等幹部は殆ど目のまわらんばかり多忙なりしも、此中資金の募集は不幸水災に遇ひて

暫時延期せざる可らざるの止むを得ざるに至り、目的の一半を失ひたる遺憾は却て選奨、大會準備等に傾注せられ、九月四日の大會は別項記載の如く、殆ど空前の水害後の事業とは思はれざる程の盛況を呈し得たり

○大會後の盛況

九月四日の大會後、二三回幹事會ありて結末をつけ、新に書記を依頼して事務をとらしむる等本會の面目漸く新なるものあり。地方より入會、紹介等の書信は机上に山積し、某幹事の如きは會館を訪へるも文書の多きに閉口して逃げ歸りたる程なりき。

○慰勞會

九月五日大會の結末も定まりしかば發智會頭は宴を川越館内に張て幹部並大會盡力者一同を招待し、勞に酬ゆる所あり、殘暑の候なれども夕風の涼しさにビールを抜て珍味を賞する愉快は又一きはにて、一同勇て益々勵精を期し、散會せしは八時頃と覺えたり。

○會頭渡韓

發智會頭は東洋拓殖會社主裁全國各村府縣篤農家韓國

視察の一行に加はり九月二十六日川越出發渡韓の途につかれ、十月二日朝鮮釜山着慶尙全羅忠清各道より京城開城平壤に至り一行の解散せる後は更に進て單騎滿洲に入り安奉沿線より關内外鐵道を経て北京に入り歸途旅順大連を視察して十一月二十二日無事川越電車停留場に歸着せられたりき。

○評議員井上力氏逝去

本會評議員井上力氏は八月三十一日逝去せられ九月三日川越仙波中院にて葬儀ありしかば會頭には特に本會を代表して弔辭を朗讀したりき。

○評議員の依頼

七月及九月左記の諸氏を評議員に依頼したり
江口胤俊氏 秋庭準一郎氏 長島圓十郎氏
木村荒平氏 山崎嘉七氏 山本平兵衛氏
菅間正作氏 菅間定次郎氏 林友平氏
渡邊吉右衛門氏 伊藤長三郎氏 森田芳二郎氏
綾部利右衛門氏 近藤巳和之助氏 木村猪之助氏
高橋幸助氏 鈴木徳次郎氏 名坂喜兵衛氏

神島 瀧造氏 原田 要吉氏 松山 百太郎氏
石井愛次郎氏 清水賢善氏 畑尾源四郎氏
小川五郎右衛門氏 矢部謙次郎氏 大河原政五郎氏
鹽川正次氏 伊藤榮一氏 北野庄兵衛氏
田島幸作氏 木下荒平氏 鹽原喜作氏
岸鼻岩三郎氏 河合銀太郎氏 小澤清次郎氏
宮崎喜藤治氏 (以上依頼順)

○幹事の増加

九月上旬依頼せし所左の如し。

谷 貞之進君 山田 房君 橋本基次郎君
平岡 貞助君 齋藤 正三君 萩野 佐一君
中島 萬吉君 村田 練藏君 渡邊 研三君
四十四年二月十一日新に依頼せる所左の如し。
加藤登三郎君 中澤 阿栗君

大會雜記

地方青年は精確 午前九時の開會に三十分前と云ふ頃から、つめかけたりな、地方青年接待口の混雑と

來たら話にならぬ。下足番は目をまわし、幹事は奔命につかれる。辨當掛の體は三つにも四つにも割いて未だ用が足りない位、其時の騒ぎは今に忘れられない。併しそれも九時を打つとバツタリ静まつて最早一人も來會者が無い。幹事はみんな會場へと向ふ。地方人士の時間を精確に去る所が特らしい。

會場の壯觀 午前九時には會場は人を以て満たされ開會の辭、君が代、會務報告、協議事項等終て市川郡長、遠賀喜多院住職等の演説あり、正午休憩。午後一時再び開會して優良學生及優良青年の選奨、郡内出身各學校卒業生氏名報告、會頭の今後の事業上に關する希望の告白ありて瀧澤男の演説正に一時間、次て川上參三郎氏の南京博覽會視察談、發智會頭は出席し得ざりし板垣伯の風俗改良上の意見を代演し、最後に高田博士の雄辯二時間に亘て滿堂殆と酔はんばかり、散會の時は四時半頃であつた。

來會者の顔ぶれ 地方青年、學生等は云ふ迄もなく隨分商家の主人公と云々様な人も見受けた。川越南町南陸會の總員や高澤町高誼會の有志なども來會し、午後よりは一層の入出て瀧澤男の演説時分からは會場に

人が入り切れぬ暑い中を外に立つと云ふ有様となつた。

樂な傍聴 此中學校の様子を知て居る人々には會場の東側に行き西日を避け涼風を受けながら、窓外にもるゝ演説をきくものもあつた。あまり暑いので幹事の連中、速記掛の連中は奔走し切れなくなつて井戸傍へかけつけるやら、來賓接待口へ行で一息つくやらするもあつた。

來賓の顔ぶれ 市川郡長 繁田武平氏 遠賀亮仲師 荒井定次郎氏 前原仙次郎氏 星野仙藏氏 近藤警察署長等は朝から參會され、澁澤男爵 高田博士の一行は午後一時から入場、その少し後に綾部惣兵衛氏が來られる竹谷兼吉氏の姿も見受けられた。此外島田縣知事は日根野侍従の案内の爲來會されず、代りに安達學務課長が來られた。

澁澤男爵の演説 は平素に比べると聲が少々小さかつたと云ふ評判だ。何しろ九十八九度もあらうと云ふ暑中、殊に午後二時前後の會場と來たらトモ形容し難い程暑い。一時間の演説さこそと察せられた。かゝる時來賓太田元章氏は早くも進んで扇面を以て風を送り

男の苦痛を軽減するに努められた。

高田博士の避暑 澁澤男は午後五時から獨乙大使館へ行く約束とかで演説後間もなく出發される。會場の暑さは益々甚しく流石の高田博士もたまらなくなつたと見えそれから暫時は來賓入口の風通しよい所へ行て居られた。

博士の雄辯 川上氏の演説が終た。板垣伯の意見代演は短い筈だから博士を迎へ行く、やがて博士の演壇へ立つや、大變氣乗がして居られることが分た。これはステキだぞと思て居ると果然大雄辯となつてあらはれた。博士の辯をきくこと幾十度時間に於て演説の分量に於て調子の乗たことに於て此日の出來は第一等に位すと思ふ。少くとも小生の知た限ではさうである。殊に博士の演説は益々碎けて來た様だ。極めて通俗等諺を取たり、普通の言語を用ゐて六シかしい術語に代へる所などなか／＼用意周到、博士の通人たる所以をあらはして居る。それに演説全體の情調が高雅で何となく英〇の名士を思出したくなるのも必ずしも小生一人の感に止るまいと思ふ。

報 告

第六回大會費用決算

(明治四十三年九月四日)

收入之部	收入總額
一金貳百拾貳圓拾錢	
內 譯	
金百五拾參圓	寄 附 金
金四拾六圓拾錢	會 費
金拾參圓	會報第一號廣告料
支出之部	支出總額
一金貳百參拾五圓七拾六錢七厘	
內 譯	
金九圓六拾七錢	大會準備費(辨當料)
	其他事務費等)
金四圓八拾參錢	大會用印刷費
金八圓五拾錢	澁澤男其也講師招聘

報 告

金九圓貳拾錢	の爲東京三回及浦和へ出張旅費總額
金參圓五拾錢	澁澤男其他講師へ謝禮
金拾四圓六拾七錢	各講師へ謝禮の爲出京旅費
金壹圓貳拾六錢	通信費及郵送料
金貳拾參錢	紙 及 封筒類
金貳拾四錢五厘	鉛筆一ダース
金壹圓貳拾錢	大會當日の徽章及茶
金貳圓四拾錢	大會當日の人夫二人
金拾圓	大會當日中學校小使六人手當
金拾六圓拾貳錢	川越會館使用料
金七拾五錢	大會當日の辨當料
金貳圓四拾錢	新聞紙へ廣告挿入手間費
金七拾錢	撰獎者六名へ與へしポケット論語六冊
	事務所備品支那かパン一個

一金壹圓 發智 太郎君
一金壹圓 古谷 喜十郎君
一金壹圓 發知 神太郎君
一金壹圓 須間 暹治君
一金壹圓 松下 操君
一金壹圓 安部 立郎君
一金壹圓 渡邊 研三君
合計金百五拾參圓

編輯たより

○編輯子昨年は如何なる厄年にや當りけん、春一回、夏二三回、秋一回と數度急劇なる病魔に襲はれ、少からず閉口仕候。
○病勢減退すれば元來が氣樂屋の事に候へば人をも訪ね、來客とも談笑し候へ共病勢の激甚なるに當ては殆ど生きた心地もせず、生れて以來始めて飛た御仕置きに遭ひたる次第に御座候。
○從て(大抵は大丈夫と存し候へ共)本年春夏の候は最も警戒を要する時節と今より内心大に危懼の感に打た

退壇の辭

編輯子

近來さつぱり書けなくなつた。面倒でならないのだ。義理にも書く氣が出ない。と云て別段ビドク多忙なのでもない。つまり文章上の若朽となつたのだ。遁世閑居したいと云ふ考は前に申述べた。」

○櫛

北田政之助

一月十七日であつた。飯能を夕刻出發して、徒歩で川越への舊い方の街道を進だ。遅くなつてから故意と此道を選だのだ、只やたらに歩いてみたかつたから。荒道は非常に廢れて居つた。慘憺たるものであつた。荒廢たるものであつた。殊に冬の夕暮のさびしさは長い街道の上、人つ子一人會はなかつた。「廢道」とても題して書く所だが駭目だ。書けなくなつたのだらう。書く以上の或物に接したからかも知れん。
例令書いた所が飾る氣は出なくなつた。只結論だけつまみだい様な氣ばかりする。此氣分を若しも人生に移せば生活に厭んだのだ。其先は人間の辭職あるのみだ。文章だけで仕合せだ。
後には新進の文章家も多い。何時まで若朽などの出る幕でもあるまい。本會には特別會員の制も出來た。格好の退隱時だ。此邊で特別會員の元老院へ入院仕らう。

秋雨の降る日——
私は線香を携へて、薄暗い共同墓地の、寺の森へ獨りて這入つて行つた。
我家の墓前には、先祖様の植いたといふ櫛が二株繁りに茂つて、眞青な吐息を洩らしてゐる。何處からともなく風が颯つ立つて、其聲がばら／＼と淋しい音を立て、散る。
私は、線香に火を點けて妹高子の墓に慰めて、急いで歸るべく歩み出した。
振り返り見て見ると、線香の煙が細々と灰かに立ち昇つて櫛に絡まつてゐる。

人間學友會獎學

事業の趣意

人材は國家の動力也。一國勢力の消長は古來人材の有無に従へり。人材を養成する所以のもの實に國家公共の必要事にして徒らに個人名利の私情にあらざる也。

我國現今教育の法大に進み、修學の道よく開け、青年好む所に從て天賦の才を發はすを得べし。然れども世に貴賤の別あり。貧富の差あり。生れて高材逸足の士、唯資力乏しきの故を以て空しく槽檻の間に朽死するもの必ずしも少しとせざる也。斯の如きは獨り其人のために悲むべきのみならず、又國家の不幸此に過ぎずと云ふべし。有識の士夙に心を用ゐざるべからざる

也。

人間學友會茲に鑑る所あり。卒先して事々此任に當らんとす。誤解する勿れ。吾人は教育萬能論者にあらず。又猥りに私恩を賣らんとするものにあらず。蓋し今日にありて此舉に出づる、聊か時勢に噴激し、天下の爲に天下を憂ふるの微衷に外ならず。願くは大方同感の士、奮て贊助の榮を賜らんことを。

◎贊助會員と寄附規定

○前掲の微旨を然りとするものは何人と雖贊助會員たることを得。

○贊助會員は獎學資一口以上の寄附を擔當す但二人以上共同にて一口引受くることを得。

○獎學資一口を金五圓と定め五個年間に年賦を以て分納するものとす。

尙二口以上引受の向は一個年分寄附額を數回に分納することを得。

○贊助會員は本會の會合に參列し會報を受領し其他本會の催す各種の事業に係はるの優先的權利を有す。

◎獎學資金の保管及支途

○資學資の拂込は本會より特派する指定差遣人に對して行はるべし。

○資金の保管及支途に就ては別に事務管理者を選定して其事に當らしむ。

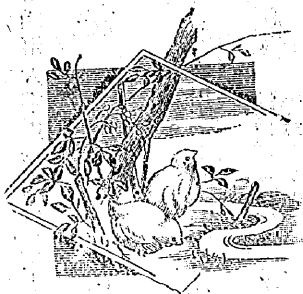
◎貸費規則

○貸費生たるに必要な資格——(1)郡内の學校に於て教育を受けたるもの (2)品行方正 (3)學業成績優等なること (4)身體健全なること。

○入學すべき學校——高等程度各種學校及川越中學校但當分其人員を毎年五名以内に限る。

○貸費月額——十三圓十圓七圓五圓の四種に分つ。但中學生にありては此以外の規定を設くることあるべし。

獎學資金の保管及支途 貸費規則



明治四十四年四月二日印刷

【非賣品】

明治四十四年四月五日發行

埼玉縣入間郡川越町大字川越六百三十一番地

編輯兼發行人 安部 立郎

同縣同郡川越會館內

發行所 人間學友會

同縣同郡入間川町三五四四番

印刷人 谷 貞之進

同所

印刷所 一心舎印刷所

川越鍛冶町



渡邊吉右衛門

吳服部

電話「川越三六番」



渡邊吉右衛門

卸部

電話「川越二百六十二番」

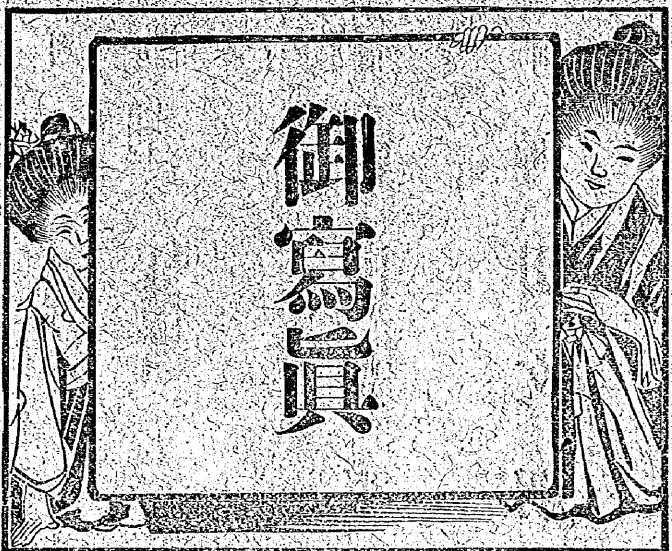


渡邊吉右衛門

洋服部

電話「川越二百六十二番」

御寫眞



川越江戸町

那珂寫眞館

電話「川越三百三十一番」

○藥種
 ○染料
 ○賣藥
 ○藥用葡萄酒
 ○カアバイト
 ○處方調劑



武州人間川町

本店 藥劑師 神田 光平

武州所澤町

支店 藥劑師 神田 文朋

波瀾多き商工界の優勝者たらんと欲する者は先づ本紙を讀め!!!

中武藏唯一
 實業機關

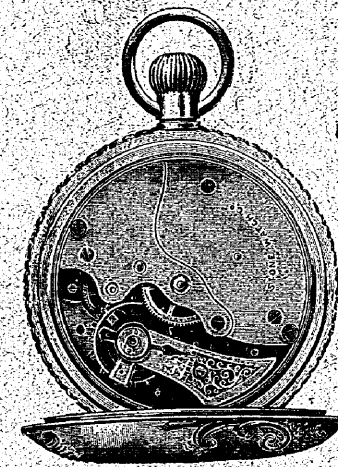
武藏商工新報

人間郡人間川町郵便局前
 一心舎印刷所内

發行所
 武藏商工新報社

振替口座東京二一九〇番
 電話

東京三光堂
蓄音器
埼玉縣一手販賣



內外時計附屬品
眼鏡寶石
貴金屬美術
工藝裝飾身具

川越南町
坂本時計店

電話 川越 二七五番

最上
醤油



文
藝
書
庫

埼玉県立図書館
31068594

電話 豊岡二番

(埼玉県入間川町一心舎印刷)